

主丈子を與へん、偏に主丈子なくんば、我れ偏が主丈子を奪はんと」と、眞淨和尚云く、偏に主丈子あらば、我れ偏が主丈子を奪はん、偏に主丈子なくれば、我れ偏に主丈子を與へん」と師拈じて云く、「請ふ各、者の主丈子を放下せよ、且く道へ、三轉語、還つて優劣ありや也た無や」といつて、拂子を擧ぐ。

朝廷より雪を祈らしむる上堂、師云く、「好雪片片、別處に落ちず。僧あり出でて聲を勵して云く、「甚麼の處にか落在す。」師云く、「楊花柳絮の飛ぶと作すこと莫れ。」進んで云く、「世尊說法、大梵天王、金色の波羅華を以て獻す此の意如何。」師云く、「錦上花を鋪く又一重。」僧云く、「世尊拈起して大衆に顯示す、惟り迦葉尊者のみあつて、破顔微笑す、又作麼生。」師云く、「物見えて主眼卓立す。」僧云く、「世尊のたまはく、吾れに正法眼藏あり、摩訶大迦葉に分付す」と、此の意又作麼生。」師云く、「黄金の擔子千鈞重し。」僧云く、「今日和尚說法、忽ち人あつて花を獻せば、未審し如何が顯示せん。」師云く、「洞中の春色人見難し。」僧云く、「只だ

萬乘の帝君、深く此の道を信じて、遠く御香を降して、瑞雪を祈求せしむるが如きんば、禱に應ずる一句作麼生。」師云く、「和氣豊年を兆す。」僧云く、「與麼ならば則ち化育を逃れ難し。」師云く、「恩を知るものは少し。」師乃ち云く、「六花瑞を現す、普賢の境界全く彰る。」三白祈に應ず、金色の真人席を避く頓に、乾坤をして一色ならしむ。艸木祥を

二十五の詩にあり。
相違者少。こゝまでは玉泉の小機、巧なることを抑ふ。
品題。品藻なり、今は秉拂の頭首の拈提をいふ、これは思の說なり。
無中取有。珠云く、「道不得の處に向つて動ず。」又云く、「針頭削れ鐵底。」或抄に云く、「一切對々の處に差別するを云ふ。」
針孔線。或抄に「是れ小見解なり」と。珠云く、「一騎打ちのせば、路大事の處。衣を縫ふに線路あり、此を線路といふ、俱に重細の事を云ふ、納僧十二時中、綿々蜜々、念々相續底の大事。」
不受人護。珠云く、「如上誘得し來つて。」
縱一機。珠云く、「奪人不奪境で、うごくものではない、銀山鐵壁じや。」權は揚眉瞬目等なり、爰業は山の高き貌、

これはみな把住なり。
奪一境則。珠云く、奪境不奪人、もてくるものみな打ち出して奪ふて、本來をうち出して見せる、無風起波。「一境は拈提懸拂等じや、縱奪共に大活現成。」
縱奪可觀。珠云く、「人境兩俱奪、自在にはたらいでも、洞山下のふるまひ。」
撥牌交割。牌をあぐるば偏く衆に報じて、相共に交割割截する底の舊物、豈に新定の機とするに足らんやなり、公私の物を分割するを割といふ。
久默斯要。珠云く人境俱不奪大事がりて久しく人に云はぬが、それはまたおれもきかぬことだと、徑山自己底を自負す、このいはぬ處にもあり、不放預聞とは不勝速説の故に。
芭蕉。慧濟は南塔涌に嗣ぐ、

涌は仰山寂に嗣ぐ、清の傳に此の縁を載す。
備有主丈子。珠云く、「臨濟下では奪境不奪人、又云く、「爲仰宗は別に宗風あり、一通り見てはすまん。」又或抄に云く「有無與奪、甚の諸訛ぞ。」唱拍相應ふ、相逢ふ、兩會家。眞淨。克文、黃龍南に嗣ぐ。備有主丈子。珠云く、「しかれば芭蕉の示衆とはどうじや、まかりならぬ、おつはだぬいで。」
我奪備主丈子。珠云く、「もたぬと云ふ主丈子を、手を指し込んで肝腸を抜いてくれべい。」
放者主丈子。芭蕉と眞淨と虛堂の今の拈語と、この三轉語じや。珠云く、「唱拍相應ふ相逢ふ兩會家。」
朝廷所雪。宋の成宗成淳三年丁卯冬十月二十五日、朝廷香

を降して使を遣はして、雪を囀らしむ、師に期應を問ふ、師曰く、「今夕と果して期に至りて爽ふことなし、師年八十四。」
好雪片々。案語なり、巖居士此の語を以て全禪客の問を引く。忠曰く、「垂語の初語なり下に將に語あらんとす、然も此の僧突出して云く、甚麼の處に落在す、故に聲を厲ずの兩字を安ず。」東嶺云く、世界の人は諸法實相と云ひ、般若波羅蜜と云ふ、中々さうではない。」
楊花柳絮。或抄に云く、「僧燈を抑下す、まつゆきのもやうをみよと、これが雪のふるところが、雪あられか。」
大梵天王。この因縁は、大梵王問佛決疑經に出づ。
波羅華。優鉢羅、此に青蓮華法華には優曇波羅華といふ。

呈す、平原の二麥、鬱然として觀つべし。海豎山椒、咸く聖澤に霑ふ、無爲願廣し、恩大にして酬い難し。須ひず江路野梅の香しきことを、雪裏の一枝斜にして更に好し、時康く物阜にして、天清く地寧し。恭んで謝し畢つて、復た云く、「民を憂ひ物を恤んで、天威を斂め、乾坤を坐斷して、四夷を肅しむ。先づ臘梅を放いて瑞雪を凝しめ、次に春色をして瑤池に到らしむ。」朝廷より、度牒二十道を降し賜ふて、常住に入れて修造せしむる、上堂、僧問ふ、「徑山古刹屋老い、僧殘る、天意還ることを好む、兩たび、宣賜を蒙る、學人上來、願はくは法要を聞かん。」師云く、「人人鼻孔遶天、箇箇恩を感じ徳を戴く。」僧云く、「記得す、馬大師、因に僧

錦上鋪花。鄭重懇懇、珠云く、「金波羅華を拈出せぬ前はどらじや、今日好晴雀噪々」物見主眼。迦葉の機を奪ふ、高くついた主の眼の至らぬ處はないぞと。黄金擔子。釣は三十斤なり、大法の重擔を表すなり、珠云く、「重きが上のさよごらもて人々不足のない、正法眼に分付せず、ゆづるものはないがもし譲つたら重うてたまらぬ。」洞中春色。仙境を以て本地を表す。珠云く、「奪人不奪境、色をも香をも知る、人ぞしる」と把住の體を指す、拈じたりとも誰も見がたからん。」萬乘帝君。度宗皇帝、新求瑞雪は事苑の注に臘を瑞となし、春を與となす。和氣兆豊年。珠云く、「天子の仁心は豊年の瑞兆。」

① 與磨則難。些子の會處あり無爲王化をかうむる。
② 知恩者少。僧を許可す、抑下す。
③ 六花現瑞。天地一片の瑞雲。
④ 普賢境界。盡く白銀世界と變ずる故に。
⑤ 三白。三たび雪ふれば豊年なり。
⑥ 金色眞人。文殊なり、文殊の世界も店をしまう、遊席は座を譲るなり、白銀世界に入り來りてじや。
⑦ 乾坤一色。雪の世界なり。
⑧ 神木呈祥。瓦の色じや、みな白妙。
⑨ 平原二麥。雪に肥ゆる大小麥。
⑩ 鬱然可觀。三白麥に宜し。
⑪ 海豎山椒。此の二句は前の此の錄十葉に出づ。
⑫ 江路野梅香。今は雪を賞ぶ故に、野梅へは日は付けぬ、只

問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意、馬師云く、「個什麼と道ふぞ、何ぞ近前し來らざる」と、此の意如何。」師云く、「漫天の網子百千重。」僧云く、「者の僧近前して、復た前話を擧す、馬大師に一脚に踏倒せられて、起き來つて呵呵大笑して道く、「百千妙義、無量の法門、盡く一毫頭上に向つて、根源を識得す」といつて、復た呵呵大笑す、又作麼生。」師云く、「乞兒錫を拾ひ得たり。」僧云く、「今日忽ち人あつて、和尚に如何なるか是れ祖師西來意と問はゞ未審し作麼生か他に答へん。」師云く、「雪後の諸峯畫けども如かず。」僧云く、「學人今日、小出大遇。」師云く、「個箇の什麼をか得たる。」僧便ち鳴す、師云く、「金毛の獅子。」師乃ち云く、「山鳴り谷應へ、風起り水涌く、

だ民をあはれむを心一片。雪裏一枝。豊年兆の故に、一枝のしなへたわんだが、おきに入つた。時康物阜。祝詞を以て祈る。復云。已下頌を以て祝斷す。斂天威。仁政を施し威武を斂む、權威らしきことはない。蕭四夷。仁あり威ある故に。臘梅。こゝは臘月の梅春にさきだつて、ひらく、凝瑞雪は化育流行。春色瑤池。寶祥の延長を祝す、民に先つて憂ひ、民におくれてよろこぶ、民を第一として天子を次にす、春色は雪花瑤池は禁中を云ふ。度牒二十道。咸淳三年丁卯の冬なり、度牒とは凡そ川家求度公界より牒を給ふ、日本の舊儀も元亨釋書に見えたり、道は通の義蓋し二十道の公牒を賜ひしたり。忠曰く、「度牒

一通に幾錢を納る云云、二十通は二萬貫を納るなり、今此に賜ふところの度牒は、寺に就いて之を買ふて錢を寺に納るゝなり。入常住とは出家をばゆるされ、其の上銀を寺へ下さるゆえ。行狀に見ゆ。僧殘。殘は凋傷なり、零落なり、今殘は僧みな散去して、少分殘るなり、荒涼さま傳舎の如し、「おちぶれる」なり。天意好還。古昔の盛に還るを好むなり。兩蒙宣賜。初は香を降して雪を祈り、今は復度牒二十道を賜ふ。人々鼻孔。點胸自得の相なり何の不足がある。僧問。水潦和尚が問ひなり。漫天網子。漫は偏なり、把住じや。馬大師の見機にどうとおとしられられた。乞兒拾得錫。久貧乍富じや、

此れ皆時節因縁なり、一毫を取ること莫きに非ず、伐木峯頂に丁丁たり。僧牒遠く中天より降る、徳を戴くこと日に新に、際遇特異なり。崇堂茲れより擧げ易し、皇恩以て報稱し難し、誓つて禪誦を、勤めて仰いで鴻休に答へたてまつる。凡そ見聞する所、悉く皆妙證なり。

恭んで謝し畢つて、復た云く、「年垂九十一、礙叢林、歴盡風霜、歲月深妙、蘊豈能超佛祖、寸衷端可格天心。」
月旦上堂、兼ねて紫巖長老を謝す、僧問ふ、「日月天徳を光し、山河帝居を壯にす、學人上來、請ふ師祝聖。」師云く、「巢は風を知り穴は雨を知る。」僧云く、「今日精嚴和尚到來、如何が祇接せん。」師云く、「茶湯畢らば、送つて

呵々大笑の處を抑下す、或解に「妙しく歡喜す」と。
雪後諸峯。「みごとほみごとじやがゑがき出されぬ、現成底がありうちのことを云ふたか、馬祖と共に手を把つて行くの大事だ」と、東嶺圓慧は云はる。
學人小出。其の趣を會して云ふ。
金毛獅子。僧を弄するなり、稱美するなり。
山鳴谷應。無心の器界と雖も時あつて是の如し、雀噪鳥鳴。
非一毫而。「應變感動、皆時節因縁の故に、些子として捨つべきなし、徑山昔時古屋今日一新す、亦これ任運の理なり、豈に取らざるべけんや、みなこれ祖師の面目じやほどに」と球もいへり。
伐木丁々。修造の體、丁々として解あり。
僧牒遠降。中天は宮中より、修羅科を賜つた。
戴德日新。天子の恩徳をば。
際遇特異。君王臣僧の際その値遇他に異なり、仕合に聖徳の天子、際は合なり、會なり、接なり。
崇堂。千僧閣をいふ、崇は高なり、鳥舉は事を作すなり、修造は則ち易なり、皇恩は報じ難し、稱は揚なり。
禪誦。坐禪誦經。
鴻休。鴻は洪と相通ず、大なり、休は美なり、帝徳の盛なるを稱す、恩徳に報い奉るより外はない。
悉皆妙證。初に應ず、喫茶喫飯にもごらんのしるしあり。
復云。頷を以て結座す。
礙叢林。後西千僧堂、上梁の上堂の末を見よ、その年の六月十一日落成す、その十月七

客位に歸せしめん。」僧云く、「恁麼ならば則ち禮遇、過座なり。」師云く、「備者裏に來つて、口袴を簾弄することを得ず。」僧云く、「記得す、慈明因に泉大道來訪す、明云く、「片雲谷口に横ふ、游人何れの處よりか來る。」泉云く、「夜來何れの處の火ぞ、古人の墳を焼き出す」と、此の意如何。」師云く、「踢天弄井人の僧を得たり、」僧云く、「慈明又云く、「未在更に道へ、」泉便ち虎聲を作す、又作麼生。」師云く、「錢は急家の門より出づ。」僧云く、「只だ和尚の如きんば、今日言句を離却して、如何が人と相見せん。」師云く、「爛漫たる葛藤拽けども斷えず。」僧云く、「且喜すらくは領話すること。」師云く、「逆耳の談。」
師乃ち云く、「起處精銳、東山の正脈潜に

日入寂す、春秋八十五なり、故にいふ、放浪として自便することを得ざるなり、隱退もえせず、依然として叢林にさへられて、住山してなり。
歴盡風霜。苦辛を喫し、歲月深し、十刹を歴るの間年久し。
妙蘊豈能。我が蘊番する所の玄妙、豈によく佛祖に超えんや、これは師が謙下の心を述べて下の句を起す、妙蘊は内徳なり。
寸衷端可。衷は心中のまこと、格は至なり。天子の心に感通するであらうとなり。
崇堂。精嚴和尚は蓋し滅翁下なり。後の提綱を以て知るべし、松源の法孫か、これは來訪を謝すなり。
壯。帝居を守護するなり。
巢知風穴。各自自知す、何ぞ説示することを待ん、分相應

又自知するなり、何物か祝聖の一句にあらざる。
精嚴。これは寺の名、紫岩は住所の名ならん、祇接はかつかうよく。
茶湯客位。これは尋常底のあしらひにせんとなり、勸修清規上二に、「迎待尊宿に曰く、湯罷んで兩序勸舊同じく客位に送る、客位は賓客及び入院の新命の安息室なり、且過の外に別に設く」とあり。
過座。勸進して座に作る、仁義道中、御叮嚀なり。
慈明。この語は客來の緣語。
片雲横谷口。珠云く、「把定して來た、蛇がゐるか鬼がゐるか知れまい。
夜來何處。淨慧峰に見えたり、珠云く、「まつくらやみから、あかりがさいた、ひよつくら石佛が見えた。」
踢天弄井。皆惡作の罪なり、

通ず、振領森嚴、松源の家法猶ほ在り。
 去る也白雲澹泞にして、出沒拘はることなし、
 住する也古栢霜を凌いで、歳寒變せず。且く
 約せずして會する一句、如何が付囑せん。
 主丈を卓して、但だ天目の塔を思へ、子陵
 が灘を語ることを休めよ。
 除夜小參、僧問ふ、門前の爆竹、消息を通ず、
 何ぞ必ずしも重ねて新に話頭を擧せん。師云く
 「腦を刺して膠盆に入る。」僧云く、「灰寒じく
 火冷じうして、歳律闌なることを告ぐ、如何
 なるか是れ。」交接頭の句。師云く、「家中怪兆
 なくんば、何ぞ必ずしも桃符を釘たん。」僧云
 く、「老和尚、福あつて、觀を徑山に改む。」師云
 く、「窮鬼擲掄す。」僧云く、「記得す、楊岐和尚
 因に除夜、驅儂を打するを見て、湘中の端

今は泉大道の賊機を抑す。珠
 云く、「天をけたり井を弄した
 り、活納僧あばれもの、やつ
 かいもの、人がいやがる。」
 ① 錢出忽家門。これ又泉大道を
 抑す、錢はわきもの、せわし
 いやつがかせぎだす、骨をを
 れとなり。
 ② 爛熳葛藤。これは僧の多言を
 責む。言句のたぐきなんとり
 みだすことをいふ、うごかれ
 たものでないとなり。
 ③ 且喜領話。珠云く、「暗に合頭
 の語と抑下の機あり、わたく
 しの語がお氣についたさうな
 珍重じやと、こいつは作家じ
 や。」
 ④ 逃耳之談。おれはきゝたくな
 いじや、今の意は聞くことを
 喜ばずじや、この語は孔子家
 語に出づ、前にも見ゆ。
 ⑤ 起處精説。の精の字を打す。
 起處は出處と一般、鏡は利な

り、此れは自行を讚す、自行
 居處はさつぱりと精説なり、
 精嚴の出處をいふ。
 ⑥ 東山正脈。五祖演法下の故に
 自然と宗旨がある。
 ⑦ 振領森嚴。嚴の字を打す已儘
 の綱領を振ひ起すこと此の如
 しと、此は化他を嘆ずとなり、
 爲人手段嚴密なり。
 ⑧ 松源家法。滅翁は松源の嗣な
 ればなり。
 ⑨ 去也白雲。これも起處をいふ、
 脫酒自在を得た故。已下は過
 退準あるを歎す。澹は水のう
 ごく貌、泞も亦澹なり、拘礙
 なし。
 ⑩ 住也古栢。去住無心自在にし
 て其の守る所を變ぜず、歳寒
 の節義をいふ。
 ⑪ 不約而會。思はず出合ふ。
 ⑫ 如何付囑。珠云く、「精嚴は同
 じく松源派にして、虛堂より
 は後輩なり、故に付囑の語あ

上人に謂つて曰く、「汝一籌他に如かず」此の意
 如何。師云く、「垂絲千尺、凡鱗を釣らす。」僧
 云く、「其の僧曰く、「何の謂ぞや、楊岐云く、「他
 は人の笑を要す。」偏は人の笑ふことを
 怕る、其の僧當下に頓に知見を忘す、還つて端
 的なりや也た無や。」師云く、「鶴臭布衫、須ら
 く脱却すべし。」僧云く、「徑山の除夜只だ百戲を
 看る、學人忽然として悟り去らば、誰が爲にか
 證明せん。」師云く、「空掃堆頭、更に墻壁を加
 ふ。」僧云く、「和尚満口に學人を賛歎す。」師云
 く、「劍戟齒牙。」
 師乃ち云く、「老いて寒に禁へず、山邊水邊
 日に曝す、春、園苑に歸る、長底短底、新
 に從ふ。」笙歌叢裏、年朝を賀し、錦綉筵中
 壽域を開く。積僧門下、別に條章あり、毎

① 但思天目塔。滅翁文體は杭の
 臨安の人、天目山の麓に家す、
 又天目と號す、先師の大法を
 荷擔して、人をうることを思
 へ。
 ② 休話子陵灘。慶州府の七里灘
 なり、言ふ意は但だ天目の紹
 隆を思へ、子陵が歸休を語る
 ことを休めよと、是れ付囑な
 り、嚴子陵が垂釣の處を子陵
 灘といふ、隱遁心を起すなど
 なり。
 ③ 消息。遺事の消息。
 ④ 刺觸入塵。不淨潔の無分曉、
 むさ／＼しい、塵から壺から、
 つら出したやうな、これは
 抑下。
 ⑤ 歳律告闌。闌は半夜なり、新
 と舊とのさかひ日。
 ⑥ 交接頭句。歳尾歳首交接の故
 に、新舊の交接。
 ⑦ 家中無怪兆。ばけもの等な

り、この徑山門下においては
 何もとまきかすことはない、
 年の去來にもかまはぬ。
 ⑧ 釘桃符。黃帝の時より始る、
 除夜のまじなひ、前事を追ひ
 效ふなり。風俗通に出づ。
 ⑨ 老和尚福。虛堂和尚の福力に
 よりて、諸堂修造せらる、此
 の上堂は修造中なればなり。
 ⑩ 窮鬼擲掄。擲掄は「からかふ」
 此の句は無福の義なり。珠云
 く、「さうもない、貧乏神も馬
 鹿にするくらゐだ、さあと卑
 下す。」
 ⑪ 打驅儂。又夜胡ともいふ、歳
 節樂を驅るを呼んで打夜胡と
 なす。
 ⑫ 湘中端上人。白雲端は衡陽の
 人、衡陽は又湘東郡と名づく
 瀟湘は其の左なり、故に湘中
 といふ。
 ⑬ 不釣凡鱗。えびやざつこはつ
 らぬ、好箇のえものをつられ

日蒙頭打坐、歲月易遷を知らず。直饒、著し來らすんば、誰ぞ鉢盂を展べて飯を喫せん。恁麼に會し去らば、眞如を。備伺せん。荷し或は然らすんば、且く臘月三十夜の一句、又作麼生。主丈を卓して、老樹波に臥して寒影動き、野煙艸に浮んで夕陽昏し。復た擧す、瀉山和尚、山下に一庵主あり、仰山去つて、他を驗して云く、「山中の和尚道く、『許多の人砥だ大機を得て、大用を得ず』と、庵主以て如何とか謂はん。庵主云く、『再び擧せよ看ん。』仰山復た擧す、庵主に欄胸に一踏せらる。仰山歸つて瀉山に擧げす、山呵呵大笑す。拈じて云く、『瀉山呵呵大笑す、是れ仰山を笑ふか、是れ庵主を笑ふか、明得せば方に者の一踏に落著の處あることを知らん。』

た。
 ① 要。求なり。
 ② 怕。はらたつなり。
 ③ 鶴。臭布彩。大悟底を抑下す。此の時佛も祖も迷悟も、皆ふるいこぼした大悟の端的じや。
 ④ 笠。掃推頭。笠或は身に作る。應なり、埴壇は椀櫃にも作る。養なり、「あくた」なり。珠云く、「きたない乞食のやうなやつだ、これは抑下なり、これは僧の事重ねて不淨潔なることを抑するなり。
 ⑤ 和尚。満口。わろがしこい抑下にもかまはらず。
 ⑥ 釘。釘。釘。釘。舌は人の僧を得たりで、いちばしのよいやつと、口中に釘を合むの漢じやと。
 ⑦ 曝。日。ひなたぼこり、殘臘なり。
 ⑧ 問。死。説するに仙壇に比す、

三九四
 禁闕に比す。
 ① 長。底。短。底。忠曰く、「草木を言ふ、所謂春風長短に任すたり、富ほ富のなり貧は貧のなり、分相應なり、從新は明春なり。
 ② 笙。歌。裏。これは世間法で早朝を賀する様子。
 ③ 錦。綉。建。中。天子萬歳を唱へて祝す。此の兩句は從新底を結ぶ故に、先づ帝宮を以て闕苑と稱す。
 ④ 納。僧。門。下。已下みな曝日底なり。
 ⑤ 別。有。條。章。已下は納僧の出世間底を述ぶ。
 ⑥ 擲。著。著は意なし、挨拶のことなり、これとつとつきおこす、飯をもくひさうもないとのこと、一向の無心、食時をも忘るゝに至る。
 ⑦ 恁。麼。會。去。これを祖師門下の事となさば。

正旦上堂、四達皇皇として、邊もなく表もなし、甚に因つてか。新あり舊ある。會得せば、此去つて漢陽遠からず。然らすんば。黃鶴樓前鸚鵡洲。
 ① 兩。班。を。謝。する。上。堂。龍。象。交。參。主。賓。互。換。す。叢。林。茂。盛。して、兩。序。人。を。得。たり。國。一。禪。師。出。で。來。つて。呵。呵。大。笑。して、鼻。孔。を。打。失。す。る。こ。と。を。覺。え。ず、甚。に。因。つ。て。か。此。の。如。く。なる。歡。喜。して。之。を。得。たり。
 ② 元。霄。上。堂。僧。問。ふ、「一。燈。百。千。燈。を。然。出。して、燈。燈。相。續。ぐ、且。く。道。へ、者。の。一。燈、何。く。よ。り。して。か。出。づ。」師。云。く、「平。生。曾。て。人。の。與。に。朱。を。連。べ。ず。」僧。坐。具。を。以。て。圓。相。を。打。して、「是。れ。者。裏。よ。り。出。づ。る。こ。と。莫。し。や。」師。云。く、「光。影。を。弄。す。る。漢。」僧。云。く、「若。し。是。れ。做。工。夫。底。の。納。子。な。ら。ば、

① 龍。象。交。參。ぬらりまんかんで不満足じや、器物の未だ成らざるを備伺といふ。
 ② 荷。或。不。然。若し眞如を備伺せずんば、又作麼生、これ年究り盡くるの一句。
 ③ 老。樹。臥。波。見。成。底。じや、此の上に向つてみよとなり。
 ④ 擲。他。勸。辨。なり。
 ⑤ 再。擲。看。珠。云く、「擲。鉤。塔。案、甚だ分明じやといふ。」
 ⑥ 瀉。山。呵。呵。大。笑。好。僧。の。處。なり。東嶺云く、「此の笑語説あり」と。
 ⑦ 四。達。皇。皇。皇。は大なり、莊子知北遊に「四達之皇皇也」、註に「皇皇は太虚の間也、裏もない表もないなり。」
 ⑧ 無。邊。無。表。太。虚。の。故。なり、以て眞際に比す。
 ⑨ 有。新。有。舊。今日は正月、昨日は大晦日と。
 ⑩ 此。去。漢。陽。不。遠。新。舊。一。ま。い。じ

三九五
 ① 黃。鶴。樓。前。ともに武昌府にあり、漢陽府とその間五里、或は七里、故に遠からず、今新舊不二の機。
 ② 龍。象。龍。の。如。き。東。班、象。の。如。き。西。班。
 ③ 主。賓。東。班。は。主、西。班。は。賓。
 ④ 國。一。禪。師。徑。山。の。開。山。なり、即ち虚堂底ならん。
 ⑤ 呵。呵。大。笑。うれしい。
 ⑥ 打。失。鼻。孔。歡。喜。する。てい。蓋。林。人。を。得。る。故。に。じや。
 ⑦ 平。生。曾。人。朱。を。連。べ。壘。を。點。じ。て、註。破。する。の。義。珠。云く、「あゝじやのかうじやのと、是ときはせぬ。」是れ什麼ぞ。
 ⑧ 是。自。者。裏。珠。云く、「金。を。捨。て。土。を。握。る。じや。」
 ⑨ 弄。光。影。漢。影。法師と相撲をとるやつ。圓相に當る。
 ⑩ 知。落。着。圓。相。の。
 ⑪ 暗。中。拾。物。大。悟。の。意。を。表。して

簡便も落ち著を知る。師云く、「備還つて落著を知るや否や。」僧云く、「學人大いに物に拾ふに似たり。」師云く、「備は是れ頭山裏の人。」僧禮拜して云く、「師の答語を謝す。」

師乃ち云く、「上元新節、處處燈を焼く、都城巷陌、市鄜邸店、觀るもの塔の如し。惟れ復た燈眼底に来るか、眼燈邊に到るや、會得せば方には是れ燈を觀る人ならん。其れ或は未だ然らずんば、多くは暗地裏に向つて走らん。」

馬安人の僧堂の禪牀四十座、及び尼師を捨するを謝する上堂、僧問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」師云く、「一鐵破三關、分明なり箭後の路。」僧云く、「僧あり、趙州に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」州云く、「庭前の栢樹子。」此の意如何。」師云く、「爲人の方便修行に勝れり。」僧云く、「僧あり、雲門に問ふ、「不起一念、還つて過ありや也た無や。」門云く、「須彌山、又作麼生。」師云く、「蘇武漢節を持して歸る。」僧禮拜す。

師乃ち擧す、鄭十三娘、一尼に隨つて、瀉山に上る、山云く、「師姑什麼の處にあつてか住す。」尼云く、「南臺江邊に住す。」山便ち喝出す、却つて云く、「背後の老婆子、什麼の處に向つてか住す。」十三娘、又手近前して立つ、瀉山再び問ふ、十三娘云く、「早く簡れ呈似し了れり也。」山云く、「去れ。」二人法堂に至る、尼云く、「十三娘尋常道ふ、我れ禪を會して口利劍の如し、今日大師に問はれて、總に一言の答ふべきなし。」十三娘が云く、「苦なる哉苦なる哉、者般の眼目を作さば、也た道ふ我れ行脚すと。」備須、らく裙衫を脱下して、十三娘に與へて著けしむべし。拈じて云く、「古人道く、肯重全きことを得ざるも、尙ほ人に檢點せらると。何に況んや、未だ己見を忘れざるをや、他の初地の菩薩を念ふに、之を徴することを欲せじ。」

主を驗す。
① 探頭。勘驗の義、山は立處をいふ、たづねさぐりなり、よくひろくであるとなり、これは抑下なり。
② 如堵。堵は垣なり、言ふ意は多衆並ひ立つて堵垣の如きなり、圍繞して見るもの衆なり。
③ 燈來眼底。畢竟眞見を知らせんがための一擲なり。
④ 向暗地裏走。かかぐるならん。
⑤ 馬安人。馬は姓なり、安人は名なり、蓋し尼女乎、安人は婦人の通稱か、鄭十三娘と提綱にあり、この類か。
⑥ 捨。喜捨なり。
⑦ 尼師。尼師壇なり、坐具と譯す。
⑧ 一鐵破三關。この兩句は傳燈二十九歸宗常の頌に見ゆ、一箭に三關を射透す、これ頓超

深微の機たり、箭後の路は空中たり、射透の跡争か分明なるを得ん、これ又頓機なり意解情量せば、早く没交渉、今拈じて祖意に答ふ。碧岩五十六期の頌にもあり、參觀すべし。西來意のまづ當位を答へたなり。
⑨ 爲人方便。化他自行に勝る。趙州の修行にもまさると、爲人とは趙州を托上し、栢樹子と答へたをいふ。
⑩ 蘇武漢節。或抄に云く、「須彌山の端的なり、甚だ大丈夫なり、不動の端的じや。」
⑪ 鄭十三娘。此の縁は顯聖尼女の部に之を載す、鄭十三娘、年十二歳の時、師姑に隨つて瀉山に到る云云。
⑫ 瀉山。大安禪師、長慶懶安なり。
⑬ 師姑。尼をいふ。珠云く、「探竿の問ひなり。」

佛涅槃上堂、僧問ふ、「此の身心を將つて塵刹に奉ず、是れを則ち名けて佛恩を報すと爲す。」師云く、「只だ爾一箇、是れ五逆の兒孫。」僧云く、「世尊入涅槃に臨んで、手を以て胸を摩でて、普く大衆に告げたまはく、「汝等善く吾が柴磨金色の身を觀よ、今日は即ち有、明日は即ち無、瞻仰足ることを取つて、後悔を貽すこと母し」と、此の意如何。」師云く、「崖に臨んで涙を見る、特地一場の愁。」僧云く、「是の如くの人天大衆、悉く皆涙を垂る。惟だ波旬のみありて、踊躍歡喜すと、又作麼生。」師云く、「甜瓜は蒂に徹して甜く、苦瓠は根に連つて苦し。」僧云く、「且く道へ、波旬は是れ誰が弟子ぞ。」師云く、「是れ佛弟子。」僧云く、「既に是れ佛弟子、甚麼に因つてか却つて踊躍歡喜す。」師云く、「三臺は須らく是れ大家、催すべし。」僧云く、「今日箇の漢あつて、出で來つて哀を助けば、又作麼生。」師云く、「吾が眷屬に非ず。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「葛藤椅子既に倒る、且喜すらくは天下太平なることを此れは是れ末世の比丘、佛忘の禪語、輕輕薄薄、我慢を以て宗と爲す。還つて大覺世尊の、金棺未だ擧らざる已前の事を知る麼」といつて、主

わたせと。
 ① 古人道。疎山をいふ、立僧者説に見ゆ、肯は諸聖を肯ひ、重は己靈を重んずるなり、諸見をはなれてじや、千變を肯ふことを得ず、己靈を重ずることを得ずじや。
 ② 尙被入點檢。疎山猶ほ香嚴に點檢せらる。
 ③ 未忘已見。此の師姑、未だ已見を忘れず、故に十三娘に檢點せらる。又宜なるかなじや。
 ④ 念他初地菩薩。見道極喜位、古も此の如き手本もあるが、馬安人破家を知つたまで。
 ⑤ 不欲微之。必ず師姑の箇の十三娘を微詰するが如くなることを欲せず、點檢するには及ばぬ極極じや。忠曰く、「葛藤椅子早く呈似し了ると云ふを見て、以爲らく微詰辨するに足らず、故に去れといふ。」

丈を卓す。
 上堂 擧す、僧、法眼に問うて云く、「慧超和尚に咨す、如何なるか是れ佛と、法眼云く、「汝は是れ慧超。」雪竇和尚頌して云く、「江國の春風吹けども起たず、鷓鴣啼いて深花裏に在り、三級浪高うして魚龍と化す、癡人猶ほ犀む夜塘の水。」拈じて云く、「法眼其の實は者の僧を啓迪すれども、猶ほ説不盡底の法あり。徑山に如何なるか是れ佛と問ふものあらば、只だ他に向つて道はん、爾筍籃を將つて水を擔つて、須彌山を繞ること千百匝して、自ら一滴子の狼藉なしと謂ふとも、猶ほ未だ汝に向つて道はざるに在らん。何が故ぞ。」佛の一字豈に濫觴すべけんや。」
 上來、末世の衆生、成道を希望して、悟を求

① 將此身心。疎云く、「この境界は險崖に手を撒し、絶後に再び蘇する底でなくば、又佛を殺し、祖を殺し父を殺し母を殺す底なり、謂つべし百尺竿頭一步を進め、十方刹土全身を現す、是れ摩訶報するなり、これが五逆兒孫じや。
 ② 母貽後悔。畧して後輯に見ゆ。
 ③ 懸崖看澗眼。澗は音虎、今は音のみを借る、懸崖に臨んで且つ虎眼を見る、謂つべし、特地一場の愁と、これ巧盡き伎窮るの境界、今は寂滅を表す。特地はどこもかしこもなり。甜瓜徹蒂甜。各々差別の境界これは本分について云ふ。
 ④ 三臺須是。三臺は曲の名なり、悲歌一致の境界、波旬底甚だみごととなり。忠曰く、「三臺は舞曲の名なり、今日本の樂舞に三臺あり、予親しく樂人に聞く、臺の字濁音に呼ぶ、「さんだい」と、大家は波旬及び人天大衆を稱す、或は喜或は笑、悉く是れ一場の三臺樂なり。
 ⑤ 葛藤椅子。經説の迂曲繁重に喩ふ、椅は概杙なり、つたかづらのまとふところのしやれ木なり、今は涅槃なればこれをいふ。
 ⑥ 天下太平。雲門のいはれしを引く。
 ⑦ 輕輕薄々。此の一着、千古の鑑戒、容易に看るべからず。
 ⑧ 金棺未擧。眞箇の如来をみよとなり、好處を指出するなり。
 ⑨ 慧超。廬山歸宗寺の法施禪師策眞、本名は慧超、法眼に嗣ぐ。
 ⑩ 江國春風吹不起。この頌は岩第七則の雪竇の頌なり、本叢書第七卷七碧岩錄第一の四十三九九

めしむること母く、惟だ多聞を益し我見を増長して、心憤憤口排排として、當代を品藻し先徳を凌躐す。把茅の頭を蓋ふことを得んと欲すること、水火の急なるが如し。出て來つて、平時の妙蘊を宣發して、後昆を啓迪せんことを要せんと擬す。殊に知らず、明眼のもの存するあることを馬。虚堂老しぬ矣、之が與に明辯するに力なし。但だ司馬が好しと稱するが如き而已。何ぞや。勢あるも儘敷あれ地より起つことを、更に高さも天あることを奈何ともすることなし。

「身を藏して影を露す。」僧云く、「國師、侍者の處にして、犀牛の扇子を索むる意旨如何。」師云く、「風に因つて火を吹く。」僧云く、「侍者云く、「扇子已に破れ了れり也。」國師云く、「扇子既に破れなば、我れに犀牛兒を還し來れ」と、又作麼生。」師云く、「老倒端なく荒艸に入る。」僧云く、「投子道く、「將ち出さんことを辭せず、只だ恐らくは頭角全からざらんことを、此の意如何。」師云く、「子期去つて後消息なし。」僧云く、「雪竇云く、「我れは不全底の頭角を要す」と。」師云く、「終に他の影子を出づること得ず。」僧云く、「師の答話を謝す。」師云く、「人なき處、斫額して汝に望まん。」

師乃ち云く、「今夏四方の衲子を聚集して、菩薩乘に據つて、寂滅行を修す、九十日の内、

一頁にも出づ、その評に委し委照すべし。珠云く、「江國は信に鶴鶴は法眼に、三級は法眼の答話に、魚化龍は惠超の悟處に比す、魚は龍と化して去つたを、疑人はなほ知らずこゝにをるかとかくみはかる、三四の句は惠超の大悟の本、汝は是れ惠超と、超の境界は其だみごと、其の處即ち是なるに、外にはなにも入らぬとみよとなり、惠超がかういふ誰がかういふと、これは愚じや。」

佛之一字。佛の一字は從上來人の解説するなし、我れ豈に始めて開道すべけん乎と物の大は小より起るを、此れを蓋鶻といふ、諸佛も不説じや、この惠超と答ふる處じや、虚堂が始めてあに説くべけんやとなり、大把住の處。

へぎまはる、水火の急なるが如し。
① 啓迪後昆。出世開導を要す。
② 有明眼者。識者の笑ふのをしらす。
③ 司馬稱好。司馬敬、字德操、折衷畏慎す、人人物を以て徹に問ふものあれば、初めより高下を辨せず、毎に職く佳と言ふと婦之を諷む、又曰く、「君が言ふ所の如き亦また佳と世説に出づ。」
④ 勢。山勢を云ふ、山の如くそばだちてもと、碧岩十一則の下語にも「任ひ大なるも亦た須らく地より起つべし、更に高きも天あるを争奈何せん。」と。
⑤ 古刹土偶。塑像なり、古刹は禁足、土偶は佛法に比す。
⑥ 異域有兩人。やさかた、風流なり、幽は深なり、深遠の人君子の象なり、これ夷狄の君

あるの謂なり、畢竟替つた處。
① 若如是。珠云く、「強健々た。」
② 藏身露影。小賊なり、珠云く「うぬが知つたふりして、身をかくしても勸殺了、是れ野塘水、あたまかくして尻かくさずじや。」
③ 國師。慶官齊安國師なり、此の縁は寶林録に出づ、批判は碧岩九十一の評にあり。
④ 因風吹火。物に託して眞を辨ずるが故に。珠云く、「ひそかに事を行ふを云ふ、扇子を便りに者箇を呼び出した。」
⑤ 老倒無端。濁に下つて爲人す。珠云く、「とし寄つてだまつて居ればよいに、圓らず云ひそこなふた。」
⑥ 投子道。侍者の無語、投子の代語じや、不辭將出とは犀牛なきにあらず、去りながら、まつたくそへませぬ。

① 孜孜矻矻として、敢て妄りに走作することあらず、一日忽ち、鐵船の水上に在つて浮ぶを見る、又之を怪力亂神と謂ふべからず、當に自ら之を體帖すべし。若し體帖得し去らば、先聖の立つる所の期限に孤かす、末後に功を收めん。苟も或は未だ然らずんば、咄終に一向に人の與に解註せず。」

② 復た擧す、欽山、巖頭、雪峯と同じく行脚して茶に會する次で、欽山云く、「若し身を轉じ氣を通ずることを解せずんば、喫茶することを得じ。巖頭云く、「若し恁麼ならば、我れ斷めて茶を得て喫せし。」雪峯云く、「某甲も亦然り。」拈じて云く、「師を親み友を擇ぶの難きこと、古之今之、欽山方に薄禮を致す。便ち人の他の座子を動することあり、徑山は

① 子期。子期の知音を絶す、雪竇云。「これも靴を隔て、痒を抓く」と珠は下語す。

② 出他影子。他は單牛。

③ 無人處。珠云く、「無寸草、又勸破了。」

④ 斫却望汝。斫は擊なり、手を以て額を遮り擊つなり。忠曰く、「和辯にまかげをさす汝を除いて外、餘人なき處なり」と。托上して弄するなり、斫は斫手ともかり。

⑤ 據菩薩。珠云く、「菩薩乘は聲聞緣覺乘に簡していふ、寂滅行は小乘有相の行に簡していふ、この會座の中にてなり、圓覺經の圓覺章にも、「安居の日に至りて、即ち佛前に於て云云。」

⑥ 孜孜矻々。孜は勤なり、矻は健作なり上の報恩錄に見ゆ。

⑦ 鐵船在水上。これ梵期修證の驗なり、これは禪坊主のよい

のくち、茶飯底」と東嶺は云ふ「誕生領是殺々盡始安居、會三得箇中意、鐵船水上浮」と廬居士の備あり。

⑧ 怪力亂神。珠云く、「こりやあやしいと云ふな、是れほど細かなことはない。

⑨ 體帖。親證の義、身にひきしめて見よ。帖は安なり、體究安帖するなり。

⑩ 咄。從上來を咄破す。

⑪ 解註。人のために、なんぼうでもえときはせぬとなり。

⑫ 會茶。「ういさ」とよます、欽山の禪に江西を過ぎて、一茶店に到りて茶を喫する次で、轉身通氣。珠云く、「出身の一路じや、自在の働なくば、なんぼうでも喫せしむることはならぬ、と欽山指す處あり。

⑬ 若恁麼。珠云く、「それならおれは喫茶することならぬまでじやと。」

則ち然らず、但だ來者あれば、便ち請じて高く鉢囊を掛けしめ、飽まで常住の茶飯を喫しせしめて、山を看水を見るに一任す。恁麼に過して、切に漏泄することを得ず。何が故ぞ。」

① 主丈を卓して、「恐らくは百鳥花を獻するに路なけんことを。」

② 次の日上堂。「百丈の清規は、千古の洪範、之を藏すときは則ち虚空跡を絶す、之を用ふるときは即ち綱令森嚴なり。徑山則ち義氣雲に薄ると雖も、爭奈せん。未だ僧堂の施設あらず、且つ今夏聖制、如何が講明せん。」主丈を卓して云く、「下座、普同作禮。」諸寮に到りて拜白せず。

③ 乘拂の夏齋を謝する上堂。僧問ふ、「記得す、僧雲門に問ふ、「如何なるか是れ諸佛出身の處。」門

① 觀師擇友。雲岩飲がやうた。

② 古之今之。むかしも今も。

③ 海體。謙損していふ、粗茶を獻じ、岩頭雪峯を契す、「ごちそうぶり、」座子は「ざしき」なり。

④ 入動他座子。人とは岩頭雪峯等なり。

⑤ 不不得漏泄。來者を漏さず、盡く接待すとなり、游山瓢水に一任すじや。

⑥ 恐百鳥。これは牛頭の縁を用ふ、「今恐らくは來者の入路なけんことを、佛前もかいでみることなるまい」と珠はいへり。

⑦ 百丈清規。百丈禪師の勸修書規は、千古の御手本である。

⑧ 藏之則。東嶺云く、建曆の九年面壁の處にも藏しておほせた。

⑨ 用之則。又曰く、「連磨が藏し

た處を、百丈が少しづつあらはした。」

⑩ 義氣薄雲。珠云く、「規矩を行はんと欲するの心なり、義を見て爲すに勇むの氣なり。薄は道なり、報恩錄に見ゆ。

⑪ 僧堂施設。行狀に「僧堂を一新す、區々たる工役の中、益匠衆を勵して怠ることなし」と、これは其のときの上堂なり。

⑫ 不到講寮。「別段に巡堂はいらぬもの、互に作禮を畧す、造營中なればなり」と珠は云へり。

⑬ 東山水上行。方語に衆所不レ到。

⑭ 舌頭不出口。本體如然の境界これは門を抑下した、短いゆえ、やう／＼水上行といはれた。

⑮ 也不較多。一般無差別なり、「蕭風身南來の句は、任運の

云く、「東山水上行」と、此の意如何。「師云く、吾頭口を出でず。僧云く、「圓悟云く、「若し是れ天寧ならば則ち然らず、如何なるか是れ諸佛出身の處、只だ他に向つて道はん、薰風自南來殿閣生微涼」と、又作麼生。「師云く、「也た多きことを較べず。「僧云く、「大慧聞き得て便ち悟り去る、又作麼生。「師云く、「箇の渾身を棄てて地獄に入る。「僧云く、「今日忽ち人あり、和尙に如何なるか是れ諸佛出身の處と問はゞ、未審し如何が他に答へん。「師云く、「三叉路口人の知ること少なり。「僧禮拜して云く、「師の答語を謝す。「師云く、「空を推つて響を聴く。」

師乃ち云く、「財法の二施、等しうして差別なし、甚に因つてか。北路は山高く、南路は山低き。一句子を會得すれば、甘露に沾ふが

自然なり、雲門と圓悟とはあまりをちはあるまい」と或抄に云へり。

●持筒渾身。渾は全なり、放身捨命、大悟の端的。珠云く、「馬鹿、やい悟つたと思ふたか」と。

●三叉路口。或抄に「諸佛出身の處は三叉路口にある」なり。

●推空聽響。僧の不實を抑す。珠云く、「強ひて音響を求むるに、元來響なしじや。」推は「うつ」なり。

●財法一施。頌古の甘露、施財の語に見ゆ。珠云く、「財施は夏齊に係り、法施は乘持に係り。」東嶺云く、「財に等しきものは法に於て亦等し、法に等しきものは財に於て亦等し。」

●北路南路。徑山の路なり。

●一句子。乘持首座の一句子、則ち頭首の法施。

四〇四

●如沾甘露。乘持の法施を受く。

●一筋子。珠云く、「一筋とは一はしくうて見よとなり、都寺の夏齊をいふ。

●羣心他德。夏齊の財施を受く。

●二俱。財法なり。

●寒幘歸。水足り草足り、大無心をいふ、桑柘はかこひの内、てんでの家なり。

●短檠無主。小柴鑪「かき」、主はなくても花は自然に開く、虛堂も任運に財法をうくともおもはぬとなり。

●張無盡居士。此の縁は本叢書第六卷一、二、一頁の大惠武庫の尾り拾遺に詳なり、參照すべし、次の句あり、「刺草頭上煎鏈子、三箇胡孫夜鏡錢」と。

●五臺山頂。解は前にあり。

●金漆桌上。白檀ぬりの机の上

如くにして、毛骨頤に清し。一筋子を投得すれば醍醐を飲むが如くにして、羣心德に飽く。徑山傍若無人。二つ俱に受けず、何が故ぞ。「主丈を卓して、「寒幘晚に歸る桑柘の塙、短檠主無うして、自ら花を開く。」上堂、舉す、無盡張丞相、玉泉の布衲皓和尚と夜話す、無盡云く、「洞山の初老也た甚だ奇怪なり、道く、「五臺山頂雲飯を蒸し、佛殿塔前狗天に尿す」と、要すらくは法身を明めんことを。」皓云く、「也た甚の奇特かあらん、它只だ法身邊の事を頌し得て、法身上の事を頌し得ず。無盡蜀音を操つて云く、「如何なるか是れ法身上の事。」皓急に紙と呼ぶ、未だ至らず、金漆の卓上に就いて大いに書して云く、「一夜雨霽、葡萄棚を打倒す。知事行者人力を普請し、拄ふる底は拄へ、撐ふる底は撐ふ、撐へ撐へ拄へ拄へて天明に到る、舊に依つて、可憐生」といつて、筆を擲つて大笑す。無盡之が爲に、石に入る。師拈じて云く、「盡く謂ふ、二大老、無礙の辯を縦にし、殺活の機を明すと。殊に知らず、慧劍相持して各優劣あることを。」

中夏上堂、事は極處に到つて則ち説き難し、理は極處に到つて即ち

四〇五

●金白檀ぬりにや。

●蜀音。はらをたて、蠻聲をだして。

●一夜雨霽。霽は滂と同じ。雨の盛んにふる貌。

●可憐生。どうぞかうぞ、ものとほりになりたとなり、日本で云ふ「やさかた」かはいらしい「じや」。

●入石。碑に刻して傳を壽しらす。

●慧劍相持。洞山にも無盡にも各々御手前に優劣あり、甚慶が優劣の處。

●中夏上堂。六月朔旦。

●事到極處。珠云く、「有相偏位是れを心に得て是れを手に應ずる處ゆえ、是れを得た人もそこを説き分けて、人に呑みこますことはならぬ、境界の至極は圓融法界じや、故。」

●理到極處。珠云く、「心で知り目で見わくることはならぬ、

明め難し。②事は極處に到つて則ち説き難し、
河目海口、③意を恣にして瀾翻す。④理は
極處に到つて則ち明め難し、⑤雲蒸し月暈り、
水瘦せ山肥ゆ。⑥作麼が ⑦二境相需ふること
得去らん。忽ち箇の衲僧あつて、出で來つて、
直饒ひ ⑧理事雙泯するも、也た是れ ⑨藥病
相治すと道はゞ、⑩山僧道はん、偏は是れ
艸鳥頭半夏子と、他の擬議せんを待つて、主丈
を拈じて便ち打たん。

千僧堂 上梁の上堂、僧問ふ、「記得す、世尊
因地、⑪髮を布き泥を掩ふて、花を然燈佛に獻
す、此の意如何。」師云く、「⑫焦埵打著す連底の
凍。」僧云く、「是の如くにして然燈佛、布髮の處
を指して云く、⑬此の方に宜しく一刹を建つべ
し」と、又作麼生。」師云く、「⑭事は叮囑に因つて

理之至極は向上宗乘じや故。」
②事到極處。珠云く、「極處一機
發展するときは自在に説く。」
③河目海口。前代の古徳じや、
「孔子は河目海口なり」孔叢
子などに見ゆ、「聖人の體相な
り」と古抄に出づ、今は機辨
の廣長を取る。東嶺云く、「縁
起法界、故に辯懸河の如し。」
④恣意瀾翻。説き易し。
⑤理到極處。珠云く、「理の極
處、事に就いて明むべし、雲
蒸し及び、山肥ゆる事相の上
理性自ら歴々として明め易
し。」縁起無性の故に、奥ふが
い説きつくされぬ。
⑥雲蒸月暈。明らかめ易し、此の
兩句物理歴々現成の故に。珠
云く、「極則處は目前分明、一
瞬をあぐべし、その端的はど
うじや、これは仲夏天氣のあ
りさまじや。」
⑦作麼。さりながら。

⑧二境相需。需は待なり、事理
相互に照すなり、理事無礙な
り、二境は理事なり。
⑨理事雙泯。珠云く、「或は今
は理は泯して事はかくれて居
る、我所我々所立て居る、是れ
は凡夫のならひ、此れを骨折
ると地獄もなく天堂もなけれ
ども、是れも前の凡夫の事相
を執へると同事じや、是れを
羅透の話を立て、天台で
は假諦觀で、此の病を抜き、
曹洞では偏中正、吾が宗では
斬猫兒如き等じや。」
⑩藥病相治。兼に實法なしの謂
なり、畢竟應レ病與レ藥、一
期の方便と。
⑪山僧道。珠云く、「藥病相治す
るも何もかまはぬ。」
⑫艸鳥頭半。二藥共に下品にし
て毒あり、鳥頭は二種あり、
川鳥頭、艸鳥頭と、半夏とと
もに今毒種を取るの義、半夏

起る、僧云く、「會中に 賢干長者といふもの
あり、標を持って指す處に挿んで云く、「梵
刹を建て已竟んぬと、此の意如何。」師云く、「
神駿鞭影を勞せず。」僧云く、「祇だ和尚の如きん
ば、千僧堂を崇建するか、還つて賢干と相去る
こと多少ぞ。」師云く、「高く他に一頭地を出
づ。」僧云く、「恁麼ならば則ち諸天花を散じて、
贊歎するに分あり。」師云く、「歸依佛法僧」
僧禮拜す、師云く、「叫呼。」
師乃ち云く、「神功宅を遷り、大覺基を開く
六百年興廢常に異なり、一萬指栖身の屋老
いて、從頭改作し、特地に條を新にする。時
に乗じて鐵石の心を操り、談笑風雲の會に際
ふ。六龍起つて舞ひ、五鳳争ひ高し、須ひ
す石を立てて功を紀すことを、祇だ此の 見

は草の名をかり、時節を云
ふ。
①千僧堂。事は前に見ゆ。
②布髮掩泥。此の因縁は聯燈の
一、類聚の三に出づ、又四教
儀の三阿僧祇の集解に畧説
す、增阿含經三に委しく出
づ。珠云く、「放身捨命の處で
根本智を開く、理智冥令して
兩方共に沙汰を絶したる處で
刹を建つべし」と、此よりの
旨を立て化他爲人するなり。
③焦埵打著。徹底大悟なり、世
尊然燈佛の所に於て、法に於
て實に所得なし、故にいふ。
機々校合の處で、他より窺ひ
がたしとなり。東嶺云く、「此
の時よりの無明業障、一時に
ぶちくだいた。」珠云く、「箇新
羅を過ぐじや、是れ什麼ぞ。」
④此方。この地この方處に。
⑤師因叮囑起。東嶺云く、「此の
句子細あり。」珠云く、「五千四

十八卷の綱が起つた。」或抄に
云く、「抑下なり、此の方とさ
すは、甚だ丁寧すぎるとな
り。」
⑥賢干長者。これは乾天の誤は
ならんと、或は賢干に作る、
干は天の誤か、この長者は衲
僧の機を具す。
⑦贊歎。梵は淨なり、刹は塔上
の柱なり、この話所出をしら
ずといふも類聚の伽藍部に
出づ。
⑧神駿鞭影。頓機獲刹の賢干長
者を美む。珠云く、「そのやう
にわざわざ建つるに及ばぬ、
本来あると差圖に及ばぬとな
り。」
⑨高出他頭地。これは又の點に
「高く他に出づること」頭地」
と、忠曰く、「初の點は一頭地
は他に屬す、後の點は我れに
屬す、出は超出の義、一頭地
は一人立つべきの地なり、並

聞味からず、忽ち箇の出格の道流あつて、出で
來つて虛堂老子、是は即ち是、幻を以て幻を
修す、何の妙理あつてか、^① 遽然として此の器
業を成すと道はゞ、山僧只だ他に向つて道はん
咸淳戊辰の秋より工を鳩めて、^② 己巳六月一
十日に至つて落成す。」

上堂、擧す、世尊因に黒氏、^③ 梵志、^④ 合歡と
梧桐花を擧げて獻す、世尊云く、「^⑤ 放下著。」
梵志、左手の梧桐花を放下す。世尊又云く、
「放下著。」梵志、右手の梧桐花を放下す。世
尊復た云く、「放下著。」梵志云く、「我れ今兩手
盡くに空す、未審し箇の什麼をか放下せん。」
世尊云く、「^⑥ 爾外の六塵、^⑦ 内の六根、^⑧ 中の
六識を放下せよ、是れ爾生死を免るゝ處なり。
梵志當下に、^⑨ 無生法忍を悟る。師拈じて云く

「世尊、^⑩ 蛇を畫いて足を添ふ、當時他の我れ
今兩手盡くに空す、未審し箇の什麼をか放下
せんと道はんを待つて、^⑪ 祇伊に向つて道はん、
爾放不下ならば、擔將し去れと。若し者の一轉
語を下し得ば、^⑫ 東土の初僧、^⑬ 西天の外道の
如くならず。」

に我れ他に勝るの義言ふ意は
「我れ賢干に超出すとなり。」
① 贊歎有分。珠云く、「^① ありがた
い義でござる、さても〜」
② 歸依佛法僧。言ふ意は、只だ
三寶に歸依して諸天等を管せ
ざるなり、諸天もきえせずし
ては花をけんぜいではと。
③ 昨々。怒る貌、昨は吼と同じ
今は機用、「うぬ〜」に〜いや
つめがじや」と珠は註す。
④ 神功蓮宅。神功は神龍をいふ
その靈變不測にして、大法を
護す、雲雨を行ふ等の功德多
し、故に神功といふ、これは
徑山の開山國一禪師に宅を遷
るなり、徑山前縁に見ゆ、龍
が老人と化して云云。
⑤ 大覺開基。大覺は僧堂の寮名、
又國一禪師の勅諡號、大覺禪
師といふ。
⑥ 六百年興廢。開闢已來の年數

其の高さを争ふとも、靈瑞を
述ぶ。
⑦ 見聞不昧。目前分明の處、眞
の石を立つるに同じ。
⑧ 幻。世間一切皆幻の如し、幻
人を以て幻間を修す、一切如
幻にして實體なし、未審とな
り。
⑨ 遽然此器。急卒に此の器、世
間を建立するの作業なり。
⑩ 咸淳戊辰。戊辰は四年なり、
鳩は聚なり。
⑪ 己巳六月。己巳は五年なり、
宮室始めて成り、之を祭るを
落とす。
⑫ 梵志。外道の婆羅門。
⑬ 合歡。ねぶりの木。
⑭ 放下著。おろせとなり。
⑮ 右手梧桐花。これは右手の合
歡といふべし。
⑯ 内六根。眼耳等の。
⑰ 中六識。眼耳鼻等の。
⑱ 禪生法忍。生は身に約す、法

此の如し、故にその間の談替
も亦異なり、僧園の尋常はな
り。
① 一萬指。千人を指すなり、即
ち千僧園、これは大慧禪師が
開く故、栖身屋老といふ、新
建にはあらず。
② 從頭改作。大惠建立の後、今
天子旨を降して改め作る、餘
の寺に特にして、新に此の條
章を賜ふ。
③ 乘時鐵石。此の堂に坐して、
時々須らく堅固向道の心を操
るべしと、操は虛堂、鐵石の
心は世人に係る。
④ 談笑風雲。談笑は居常の謂な
り、際は接なり、風雲は大匠
百官をいふなり、此の堂に居
して、常に大臣が貴介の慶會
に接すとあり、因縁和合か。
⑤ 六龍起舞。日輪をいふ、莊嚴
美麗なるなるもの等をいふ。
⑥ 五風爭高。千僧園と五風樓と

は心に約す正に生法に空の眞
理を悟る、身心安忍、不動を
無生法忍となす、即ち不退轉
地、初地已上なり。
⑦ 畫蛇添足。巧を弄して拙と成
すじや、前にも見ゆ。
⑧ 東土初僧。初は「納」と作すべ
し、この梵志を云ふ。
⑨ 西天外道。上の對にして、此
の如く云ふなり、黒氏と云は
んが爲なり。
⑩ 今夜小參。その聲僧の如し。
⑪ 甕裏何曾。轉身しがたきをい
ふ、「茶釜の中のスツぽん、何
の動くべい」と珠は云へり、
又依然として舊窠甕裏に在
りと。
⑫ 僧問。これも上の僧と同人な
り、溪抄に別僧とあるば非な
り」と思は云へり。
⑬ 九旬禁足。三月安居。
⑭ 鳥入籠籠。生熟盡時置作レ 繭
如何透得者三重。
四〇九

す。「師云く」新婦驢に騎れば阿家牽く。「僧云く」如何なるか是れ三月安居、鳥籠に入る。「師云く」向來岳頂を披く、今已に神州に逼し。「僧云く」如何なるか是れ生熟盡る時蠶繭を作す。「師云く」語は是れ心苗。「僧云く」如何なるか是れ者の三重を透得する。「師云く」魚眼裏の針綿。「僧云く」記得す、洞山和尚、衆に示して云く「秋初夏末、兄弟家、東に去り西に去り、直に須らく萬里無寸草の處に向つて去るべし。」と、此の意如何。「師云く」鸞鷲股裏に多くは肉を割く。「僧云く」後來僧あり、瀏陽菴主に舉似す、菴主云く「何ぞ門を出で、便ち是れ艸と道はざる」と、又作廢生。「師云く」秤尾星邊、重輕を較ぶ。「僧云く」洞山聞き得て乃ち云く「大唐國裏能く幾人かある」と、爲た

これは古徳の頑なり、未だ其の人を害にせず、九旬禁足とは不自在、三月安居も不自在、生熟盡るとは所謂護生は須らく是れ殺すべし、殺し盡して始めて安居と、蓋し生熟共に盡して藥病相治して、始めて安居を得るとき、又是れ桑蠶繭を作りて、自らまとひつゝ、むなり、尙ほ覺醒と作す故に、大死一番底をいふ、如何透得者三重と、三重は魚、網に投じ、鳥、籠に入り、蠶繭を作るべし。

① 一掃驢作。三重の圖をうち碎く。

② 若慈度。珠云く「さて、和尚には俗利の義でござりませ」と。

③ 性燥納僧。燥は當に僕に作るべし、性の疎なる貌。

④ 無出和尚。和尚の上に超え出づるものはない。

⑤ 適之。たましくなり、之は助字。

⑥ 新婦驢。婦は「はなよめ」姑をいふて阿家となす、或は大家となす、家は昔姑なり、正宗贊首山草に「本叢書第六卷五四頁」を参照せよ。「これは不自在底じや、顛倒の義じや、無位の眞人を以て規範の内に入る、故に不恰好じや」と珠は云へり。

⑦ 向來岳頂。この兩句は偈頌の觀山水圖の中に出づ、古句なり。珠云く「これは雲を謂ふ所謂太山の雲、膚寸にして合して天下雨ふると、淮南子十三に出づ、そのやうな馬鹿なことではないに依つて、是れがありがたいとなり」神州は天下中に一ばいなり。

⑧ 語是心苗。言語は之れ心川の苗種なり。忠云く「心が苗なり、心即千苗の義に非ず、心

復た是れ他を肯ふか他を肯はざるか。「師云く」帽を買ふに頭を相す。「僧云く」只だ新建の千僧堂の如きんば、已に自ら工を畢ふ。兄弟家、還つて東に去り西に去る底あり廢。「師云く」時に臨んで包裹す。「僧禮拜す、師云く」須らく是れ此の如くにして始めて得べし。「師乃ち云く」入夏以來、並に工夫を做す底の時節なし、毎日只だ千僧閣に登つて、被位を守り、大覺寮に上つて飛雲を看、波波掣掣として、九旬を過了することを知る。然も是の如くなりとも雖も、直饒ひ七佛出で來るも、也た他の起處を覓むること得ず。時自恣に臨んで、繩頭子、越に自ら把得して緊し、何が故ぞ。蓋し他は是れ明眼の衲僧にして、終に小小の結果著を肯はず。」

田より生ずるの義なり。」

① 魚眼裏針綿。小機小見の義、魚の針線を見て怖るるが如し、本と三重を透得すべきなし、自目に物みて怖を作すに喩ふ。

② 鸞鷲股裏。割肉は「けづりおとせ」といふことじや、示衆の密機、太だ辛辣

③ 秤尾星邊。忠曰く「瀏陽を抑下して、洞山と輕重多く異なるらず、小賣弄じや、日機鉢兩底に非ざり故なり」秤は「はかり」、星邊は「はかりのめ」なり、無寸草とは便ち是れ艸と云ふ處をいふ。

④ 買朝相頭。大唐國裏有三幾人と、瀏陽菴主の如きもの、大唐にも少れなり、買朝とは機々相合の義、恰好の義、言ふ意は洞山瀏陽と見解相合す。和辯に「われなべにとちぶた」なり、似たりよつたりじ

やと。

⑤ 兄弟家。師家が學者則ち會下のものを呼ぶ詞。

⑥ 臨時包裹。解夏には起單裝包す、行きたくは襖子を裏んで東西すべし。

⑦ 須是如此。僧を弄す。稱名してなり。

⑧ 守被位。忠曰く「僧堂の座位に被位、鉢位あり、被位は是れ大衆(平僧)、僧堂に排するの位なり、鉢位は是れ聖堂の衆(出世以上の僧)、僧堂に排するの位なり、守は「かぞへる」放行なり、前の做工夫は把住なり。

⑨ 波々掣々。波は當に跛に作り掣は單掣となすべし、不具足のことなり、前の興聖錄の解夏小參に見ゆ、あつちへぶらりこつちへぶらり、ぶらりぶらり。

⑩ 也竟他起處。起處進退、此の

復た擧す、黄檗、南泉の會中に在つて、首衆と爲る、一日鉢を捧げて、南泉の位中に向つて坐す、南泉堂に入つて問ふ、「長老甚麼の年中にか行道する。」檗云く、「威音王已前。」泉云く、「猶ほ是れ。」王老師が兒孫なり、下り去れ。檗、第二位に於て坐す。雪竇拈して云く、「惜むべし王老師の、只だ錐頭の利を見ることを。我れ當時若し南泉と作らば、伊が威音王已前と道はんを待つて、便ち第二位に於て坐して、黄檗をして一生起つこと得ざらしめん。」師拈じて云く、「明覺は一代の龍門、古今を針割して前作を凌跨す。是は則ち是、順水に帆を張る、若し恁麼ならば、其の師法何くにか在らん。」

如く蹤跡なき故に。珠云く、「過了九旬底、安身立命の處を見ることはなるまい」と。
① 臨自恣。これは放行、水牯牛、繩頭子も手をゆるさぬ。
② 越。發語の辭なり、自ら把得し、緊しとは、いよく布袋を解開せずとの謂なり、これは把住じや。
③ 終小小結果。大機修因の故、小小の結果にあらず、凡そ事の成辨をいふなり、一夏辨底は但だこれ小小の結果、着のみと肯はぬ。他は一會の衆を指す。
④ 首衆。首座。
⑤ 行道。出世開堂。
⑥ 威音王已前。珠云く、「とつとの昔し。」
⑦ 王老師兒。黄檗已に劫限を立つ故に。
⑧ 第二位坐。珠云く、「はかりがたき底なり、さうかなと觀り

四二二

入つて、南無三寶と見事のことじや。」
① 只見錐頭利。忠曰く「今は少分を謂ふ王老師の兒孫といふ處。」珠云く、「ぬしのきれもの齒ものを見たいばかり。」
② 明覺一代。珠云く、「明覺は雪竇和尚の證說明覺に肯はれねば、坊主中間へ入れぬ如く。」
③ 針割古今。古今の因縁を批判是非すとたり、前作は前代の作家なり。
④ 順水張帆。一向の謂なり、黄檗の機に順じて、崖に臨んで人を推す、便りを得たなり。未だ活潑ではない。
⑤ 若恁麼。珠云く、「師學の分ちが立たぬ、南泉の働き、なる程見事、どうよくな云ひぶんだと、尤もじやげにはさうじや。」
⑥ 其師法何。その師法の位を失ふべし。

蠅蝦眼裡に納る。此れは是れ衲僧家、九十日の内、游戲の法門なり。今朝布袋を解開す、且く功を收むる一句作麼生。王丈を卓して、「玉宇澄肅として、巖壑秋を生ず。」
維那、知客、浴主、侍者を誦する上堂、「一槌未だ擧せず羣聽を驚す、綱令清嚴なり。三絨纒に啓いて來賓を驗す。頂門眼活す、只だ垢を洗はず塵を洗はざるが如きんば、畢竟箇の甚麼をか洗はん。」王丈を卓して、「耽源國師に侍すること久し、必ず能く之を知らん。」朝廷より雨を祈らしむる上堂、問答罷んで、師云く、「神本。靈ならず、敬して之を禱るときは、則ち靈なり。敬して之を禱りて。既に靈なるときは、則ち能く虚空を掌上に搏り、早魃を天隅に驅る。雲霧を四郊に布

① 追大鵬云云。大小圓融、不思議解脱、遊戲自在、無礙三昧。
② 玉宇澄肅。玉宇は天とみよ、望月の時節の故に、是れ現成直示をいふ。
③ 一槌。維那。或抄に云く、「生前の一句を吾がものにしたいたなり。」
④ 三絨。知客。珠云く、「來賓の口なり、言ふ意は來客未だ口を開かず、早く他を驗み得るなり、口を三絨といふは、但だ一槌に對せんが爲なり。」
⑤ 頂門眼活。これも知客、能辨來機。
⑥ 不洗垢不洗塵。これは浴主なり。侍者と浴主と兼ねてみてよし。
⑦ 耽源侍國師。これは侍者なり。頌古に見ゆ。
⑧ 靈。靈應靈感奇妙あり、これは提綱の句なり。

四二三

① 既靈則。言語語端に難題の處を云ふ。
② 搏。謂ふ、造化を斡旋す。
③ 羣。羣。羣は「おひしりぞく」羣は羣鬼なり、ひでりのかみ。
④ 四郊。邑外を郊といふ、東西南北。
⑤ 注甘露。左傳に雨ふること三日以上を霖といふと、「九野は八方と中央なり、地の九野も同じ」と、忠の注に見ゆ。
⑥ 富足。足は物を添ふるなり。煙浦ば雨の縁なり。
⑦ 雲村。これも雨の縁なり。
⑧ 慶合。雨あれば君も臣も一同に喜ぶ、その端的の一句はどうじやと。
⑨ 明出生下。明良の臣佐下に生起す、精白のこと、君臣合體は太平の祥なるをいふ。
⑩ 穩々當中。和敬南面で、深遠の意、天子の容なり、意は即

き、甘霖を九野に注ぐ。漁、煙浦に歌ふ、咸
富足の年と稱し、樵、雲村に唱ふ、共に昇
平の化を樂む。然も是く如くなりと雖も、且く
君臣、慶會の一句作廢生し主丈を卓して、
明明として下に生じ、穆穆として中に當る。
朝廷、明禮の大禮して、晴を祈る上堂、問答
録せず。師云く、「天地の大は、孝を以て本と
爲し、聖人の教を立つるには、禮を以て先と
爲。孝を以て本と爲るときは、則ち天地を
感じ鬼神を動す、禮を以て大と爲るときは、
則ち上帝に享し祖宗を敬す。以て造化を
斡旋し、樞機を密運することを致す。
月長空に滿ち、雲嶽面に收まる。此れ猶ほ是
れ轉句、作廢生か是れ奇特の一句。主丈を卓し
て、「明禮の大禮、杲日天に麗く。」

ち君臣の處ところ、言ふ意は
此の如き聖君、賢臣慶會する
ときは、則ち雨暘德澤自然に
天下に遍しとなり。
①明禮。「いざさよくつゝしむ」
なり、朝廷明禮の大禮を行ふ
て、祖考の廟神に告げて、以
て晴を祈るなり、明は潔、禮
は敬なり、以て神に事ふるの
禮。
②以孝本爲。孝は徳の本なり、
敬の由て生ずるところと孔子
もいへり。
③以禮爲先。禮に非ざれば成ら
ず、教訓して俗を正す、禮に
非ざれば備らず、故にいふ。
④感天地節。大舜や二十四孝の
如きこれなり。
⑤以禮爲大。大恐らくは先の字
に作るべしと。
⑥享上帝。孝禮の二つのもの
重々開説すること此の如し、
明禮大禮を佐贊する所以な

①斜旋。くるくるとめぐらした
り。
②靈運。ことごとくとりとゝの
ふなり。
③樞機。樞は門闥、機は弩牙、
並に肝要、これは天子の政に
比す。
④此猶ほ轉句。これは向上の宗
乘に非ず、未だ補則とせず、
轉句は轉轉反覆、未だ究竟に
到らざるの句なり。
⑤杲日麗天。明禮の大禮を行は
れたならば晴を祈るじや、天
もうふふかならんと。
⑥長沙與仰山。この縁は傳燈千
聯燈六の長沙の章に教む、向
月とあり。
⑦輪機是人。これは博塞の語な
り、言ふ意はひたすら他人の
本を算へて、自己を顧みず、
故にまくるなり、以て仰山の
他を勧すること、太だ過ぎた

中秋月なき上堂、僧問ふ。「長沙と仰山と月を斲ぶ次に、仰山云く、「人
人盡く者箇あり、甚としてか用不得なると、此の意如何。」師云く、「輪
機は是れ人の本を算ふ。」僧云く、「長沙云く、「恰も是れ備を借ふて用つて
看ん」と、又作廢生。」師云く、「無文の印子胡亂に搭く。」僧云く、「仰山云
く、「備作廢生か用ひん」といつて、長沙に一脚に踏倒せられて、起き來つ
て云く、「師叔直下に箇の大蟲に似たり」と、還つて端的なりや也た無や。」
師云く、「未だ是れ性燥の漢にあらず。」僧禮拜す、師云く、「短處に長を求
む。」
師乃ち云く、「金色世界の人、月を見るときは必ず喜ぶ、它の淨潔地上に
坐在して、始終脱不得なるが爲なり。洞山云く、「折合還つて炭裏に歸
して坐す」と、蓋し曹洞の宗旨には、炭を以て之を正位と謂ふ、會得
せば、方に馬大師を檢點得せん。然らずんば、一へに併轉して炭庫
裏に向つて坐せん。」
上堂。「靜の極は、動則ち虚なることを知らず、動の極は、靜則ち應な
ることを知らず、動靜一律にして、中道に妙なり。稍僧家、此の三昧を得

るに比す。忠曰く、「この機
字をみるべし、わざと他にま
くるなり。
①恰も是れ備。ちやうどとい處へ
出やうだ。
②無文印子。これは長沙の亂り
に飢話するを抑す」とんとよ
めぬひつづれたか」と珠は云
へり。
③短處求長。僧を抑す、小を得
て足れりと爲す。珠云く、「な
んでもないことによい事がま
しく禮拜をする。」
④金色世界。文殊の世界なり、
華嚴の十二に、如來名號品に
曰く、「東方不世あり、金色と
名づく、佛を不動智と號す、
彼の世界の中に菩薩あり、文
殊師利と名づく。」泰山のこと
もみるもよし、應現ゆえ、現
量分明の境界なり、今夜月な
し、故に此の見の人を抑ふ。
⑤始終脱不得。此の窟窟を出づ

れば、長河を攪いて酥酪となし、大地を變じて黄金と卓すも、未だ分外と爲す。然らずんば、主丈を卓して、匹栗斯箇の青橄欖を喫す。

開爐並に佛殿を 翻蓋する上堂、僧問ふ、「徳山門に入れば便ち折却す、和尚門に入れば、重ねて建つること一新す、此の意如何。」師云く、「汝纔に門に入れば、先づ汝が鼻孔を穿却す。」僧云く、「恁麼ならば則ち 各門風を立て去れり也。」師云く、「低聲低聲、墻壁耳あり。」僧云く、「此の事は且く止く、記得す、趙州、衆に示して云く、「我れ三十年前、火爐頭に在つて、箇の無賓主の話を説く」と、此の意如何。」師云く、「投するに五十の棒を以てして、臂を擧げて滄海に釣る。」僧云く、「如何なるか

ることはならぬと、寒山を抑下す。
⑦折合還歸。これは兼中到頭まひをさめのことを折合といふ、曲終を合殺、又は割殺といふ、炭裡は正位、平等無差別の法界、大地黒漫々じやと珠の説を折中してこゝに出す。

⑧以炭謂之。丹霞淳の五位の序の畧に云く、黒を借つて正を權(あらはし)し、白を假りて備を示す、上の淨潔を奪つて云ふ、無月の上堂ゆえ。

⑨會得。本分の正位、黒漫々地の處、此の圓明な處を會得したならば、又「暗昏を以て淨潔を脱したならばじや」と珠の説なり。

⑩馬大師。馬祖の數月の機を見る。一併轉向。輕健なり、一邊堅く把定して、無月の黒處を守

らんとなり。珠云く、「兩方からくさびをうつを云ふ、どつちえもぬけさせぬを併轉といふ。おしこめて坐禪せしむるを炭裏云云といふ。

⑪靜之極動。靜は動の處、動は靜の應なり、二のものみな是れ同一幻境なり、此の妙の了達するときは、眞如中道に妙契するなり、蓋し動靜の二相了然として生ぜざるが故なり、動上の寂、靜動の應、動靜一律は双混の心、妙はからふの心なり。

⑫變大地黃。供養するなり、又未レ爲「分外」とは淨慈後錄に見ゆ。

⑬匹栗斯喫。舊説には、匹はに作るべしへ、匹栗斯は波斯「べるしや」國かんらんは青果と俗に呼ぶ、今は外夷人語言不通ゆえにその若甘を辨ずるあたはずべし、沒滋味の義。

是れ賓主の話。」師云く、「鈍鳥離邊毅として去らず。」僧云く、「謂つべし、冷暎箇の中に火色

を見て、祖師の心印爲に親しく傳ふと。」師云く、「果然として跳不出、僧云く、「趙州道く、無賓主の話、今に至るまで人の擧著するなし、又作廢生。」師云く、「孫贖放癡。」僧云く、「今日徑山開爐、還つて學人が議論を許さんや也た無や。」師云く、「斬釘截鐵、未だ是れ作家ならず。」

師乃ち云く、「雪あり霜あり、寒あり 燠あり、四時遷謝して、變化同じからず。山僧今年八十五、骨冷じうして氷の如し、纔に 燠の字を聞けば、手を擧げて之を謝す。何が故ぞ。老來灰を挑げ火を弄することを免れ得たり。」

⑭翻蓋。やねのふきかへをするなり。

⑮徳山入門。拆は音「たく」に到る處寺、ことに佛殿といふ名がいやじやゆえに、便ちぶちくたく、この事は本叢書の第六卷正宗贊一の三〇頁に「師凡そ住院、佛殿を拆却して獨り法堂を存するのみ」とある参照せよ、「これは元來百丈の本意なり」と思は説をなす、傳燈の百丈章を引く、今は畧之。

⑯穿却汝鼻孔。これは虛堂底なり、拆却重建、二途共に奪ふて、早く勘了する、臟腑を見透して。

⑰各立門風。徳山虛堂此の僧でんでに思ひ思ひに門風を立つと。

⑱低聲々々。把住の賊意、魔言只だ人の聞かんことを要せざ

るなり、どこやらきくもいやじやとなり。

⑲趙州示衆。これは開爐の因縁。

⑳擧臂釣滄海。この事は青玉錄に見ゆ。珠云く、「只だ凡庸を釣らず、大根器の學者を求む。」

㉑鈍鳥離邊。毅は果敢なり、「しぶとく」「じろりとして」などなり、と珠の説なり、「じやうごは」などを云ふ、賓主のかけねにつかまつてをる、此の僧を抑するなり。

㉒冷暎箇中。此の僧、自ら大悟と稱す、珠云く、「強ひて惺々なり、今爐中寒冷の中に、火色を見るは、末世の中に傳心の正師を見るが如し」と、開爐に託して師を托上す、直下に祖師は即心即佛だと。

㉓果然跳不出。僧を抑す。

①孫贖放癡。孫贖の事は報恩錄に見ゆ、放癡は「つくりばか」なり、常には馬鹿のやうで、古今無類の智謀ある、大智は愚の如しの人、今趙州の賊精を擬す。
②遊學人。珠云く、「馬鹿め、さま／＼のことを云ふ、こいつ重ねて出すなど。」
③斬釘截鐵。珠云く、「況んや其の方

の如きをや、鼠に金行燈何にして
④師乃云。細字の古本には師の字なし、これは龍溪が之を加へしなり。
⑤懐。乙六の切、熱なり、暖なり、「あたゝか」なり。
⑥縫開懷字。珠云く、「ぬくいものを召して、こゝへござれと云はるれ

四一八
ば、それがうれしいと謝語なり。
⑦老來挑灰。珠云く、「凡そ此の語、三賢四果ものぞいても見ることはならぬ、師は咸淳五年己巳十月七日示寂せらる、之を考ふるに、この上堂は遷化の七日前に當る。七日前まで御きげんよく、さて上堂が活きてをどるやうな。」

徑山後錄終

國譯虛堂和尚語錄卷之十

偈頌後錄

師、淨慈に入つて陸座、問答罷れで、忽ち ① 天使門に踵る、② 聖旨を傳奉して問ふ「趙州甚に因つてか八十にして行脚し、虛堂甚に因つてか八十にして住山す。」師乃ち就いて舉す、「趙州行脚して、一日臨濟に到る、方に足を濯ふ間、臨濟問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」州云く、「怡老僧が洗脚するに値ふ。」濟 ③ 近前して聽く勢を作す、州云く、「會することは、便ち會す、啞噉して作麼かせん。」濟方丈に歸つて門

①後錄。この二字は註とみるべし、この二字古本になし。
②傳奉聖旨。師、景定五年の正月十六日を以て淨慈に住す、正にこれ理宗の聖旨なり。
③淨慈。臨安府南山の淨慈報恩光孝禪寺、開山は永明壽禪師。
④趙州因甚。忠曰く、「言ふ意は二師の放牧、甚に因つてか異なる、趙州八十行脚とは叢林古今一齊に誤る、以て八十歳にして始めて行脚をなすとすれば非なり、趙州南泉を去るの後、諸方に行脚して八十歳

に到る、方に趙州城東の觀音院に住す、凡そ住持四十年、壽一百二十歳にして寂すと云云。虛堂、淨慈に遷住するに遂に此の數問あり、若し實に據らば趙州は八十にして行脚を罷めて住院し、虛堂も亦八十にして淨慈に住すと云云を、犁耕に遊ぶ。
⑤怡老僧洗脚。珠云く、「ちやうど洗脚する處に來つて、そなたは問ふな。洗脚は「せいきやく」とよます。
⑥近前作聽勢。珠云く、「狼にかいとをねぶられるやうな。」

を閉却す。州云く、「老僧八十行脚、今日却つて者の驢子に撲せらる。」輒ち一頰を成す、天使 楊都知繳奏す、龍顔大いに悦びたまふ。特に米五百碩。絹一百緞を賜ふ、開堂して衆を安せしむ。續いて糧食の 闕典、僧堂の弊漏を以て敷奏す。伏して 聖恩を蒙りて、水田を 撥き賜ふ、歳ごとに租三十餘石を收む、並に官税を免る。仍つて 楮券一十萬貫を頒ち降したまふ、重ねて僧堂を益く頌に云く、

趙州八十方行脚、虛堂八十 再住山、別有一機恢佛祖、九重城裏動龍顏

集慶の開山に寄す。

如意來尸釋梵宮、雨華狼藉濕春風

① 唯・唯・唯。くらしひついでむし。勸諭の謂なり、いじりまはしてなんのまねじやと。

② 老僧八十。忠曰く、「本録には三十年行脚、今日爲人、踏下注脚」とあり、今教問を潤色せんと欲して、故にかくいふ」と。

③ 撲。「はちきたふさる」とこがはねられたぞ。

④ 楊都知。楊氏名不詳、都知は官名、繳奏は謝封なり、「そのとほり」此の頌を續封して、天子に奏上するなり。

⑤ 緞。一匹なり、絹一百匹なり僧堂の帳の用に充つ、行狀にも「絹百疋を賜つて帳を造る」とあり。

⑥ 闕典。禮の當に行ふべくして行はれざるをいふ。

⑦ 撥賜。除なり、踏田を水田といふ、水を以て稻を養ふなり。

四二〇

⑧ 楮券。紙幣なり。

⑨ 再住山。再は、忠曰く、「兩回淨慈に住するに非ず、前には諸刹に住し、晩年明覺の塔に退閑して、終焉の計をなす、不意に詔あり、復た出で、淨慈に住す、故に再び住山といふ。龍溪云く、「一二の句は途を同じうす、三四の句は帳を同じうせず、言うは途を同じうするなり」と、別看「一機」の佛祖の道を恢張するあり、即今天使の聖旨を傳奏する是れなり、九重までひびきわたつて此の頌が、いかい御悦びなされたとなり。趙州と虛堂とは一般とはいひながらじや。

⑩ 集慶。「しつきん」とよまず、佛光照法師なり、宋の理宗の紹定二年詔して下天竺に住せしめ、尋で上天竺に遷らしむ、佛光照法師の號を賜ふ、集

自慚老矣無靈骨、日在深雲聽講鐘。靜學林府判が、天澤庵に遊ぶの韻を廣く。

古道兼禪到、躬行得幾年。乾坤資定力、心月鑑前緣。一靜人難學、三生話未圓。老來重有約、不在北山邊。

洞陽居士の廉監丞に答ふ。

冷冰冰地洞陽春、葉籥乾坤萬物新。拋下葛藤提不起、不知纏縛幾多人。了侍者の台山に遊ぶを送る。

慕臚高舉興何窮、秋在黃蘆葉裏風。已事未明如蹈火、白雲深處見巖翁。來知客慈峯より乳竇に之いて、明覺の塔を瞻禮す。

湖邊問路入深雲、十載心香一炷焚。

① 慶寺新成旨あり、開山とす、台宗の北峯に嗣ぐ、前の偈頌に見えたり、實を致すの頌なり。

② 如意來尸。如意は講僧の執るところなり、釋梵宮は集慶を云ふ。

③ 雨華狼藉。雨華は講主の瑞感なり、ひとしほうつくしいとなり、「一二の句は佛光。

④ 自慚老矣。そこもとほうらやましいことじや、この虛堂は年をとりにて山へ入りてをる。

⑤ 日在深雲。安閑無事で隣境ゆえ、講經の鐘をきく。三四の句は自ら弘法の力なきを述ぶ。

⑥ 靜學。靜學は別稱乎、林は氏府判は官と、忠の説なり。

⑦ 天澤庵。徑山にあり、虛堂和尚の創して歸藏の地となすところ。

⑧ 古道躬行。此の公、古聖の道を好み、兼ねて祖師禪を學び、儒釋兼備す、これは一朝一旦のことに非ず、世々生々の靈骨あり。

⑨ 乾坤心月。到る處定を得るは、則ち乾坤之れを養くるなり、惠心を成就して、明了なること月の如し、故に能く前世の夙縁を鑑むと、天の清き地の響き、以て定力を資く、風風々々水浪々たる、みなこなたの定力をたすくる。前縁は宿命じや、威音王已前じや。

⑩ 一靜人、三生。これは靜學の字を打す。靜は即ち寂靜、所謂一靜一切靜、故に餘人は之れ學び難し。此の句は通慧、領聯腰聯、共に上は定、下は慧、是れ則ち一體なり。三生石は天竺寺にあり、むかし君とこの地に居たれども、またそれまでは話し盡くされぬ

と。

① 老來不在。師は茲の年八十餘、故に老來といふ、預め重ねて會せんと約す、老年の故に、北山中竺の邊に行く能はず、又須らく此の天徳庵に来るべしとなり、必ず、こちらへ来て給はれとなり。

② 洞陽居士。洞陽は蓋し地の名、指して居士號となす、慶は姓、翁は名と、忠の掣耕にあり、監丞は官名。

③ 冷冰、寒箭。餘寒もきびしくて洞陽の春になれども、居士が行きてから、乾坤を風化し、萬物が成く新なり、これ任運天眞の風光を示す、居士の仁徳を云ふ。

④ 地下。不知。言ふ意は此の天眞の旨を證する時、從前參得底の葛藤の語句を地下して、重ねて提携し起さず、今願み思ふに、道の葛藤人を縛ること、その數知るべからず。

⑤ 了侍者。未詳なり。

⑥ 慈腹。秋在。舉は立つるなり、行ふなり。鐘亦腹に作る、羊鼻なり、今は宗師の道香をいふ、道香を飲慈して獨り自ら深く思ひ、高く擧げて遠遊する故に、そのおもしろきはてなしと、秋黃蘗葉裏の風に在りとは、送行の時を序す、さぞ因縁を催すであらう。

⑦ 已事。白雲。急切なること此の如し、うか／＼するなとなり、巖翁は寒山を指す、言ふは已事未だ明了ならずんば、切に領らく重雲綿密、人跡不通の處に到りて、寒岩翁に見ゆべしと。

⑧ 來知客。天童石門來は大川濟に嗣ぐ、清管て大慈山に住す、來公慈峯に知賓たり、親しく大川に見え偶々乳寶に之くなり。

⑨ 湖邊。十載。燕峰。乳寶共に四明にあり、湖邊は燕峰、深雪は乳寶をいふ、載は年なり、十年の間、羶むところの心字香宜しく一炷に焚くべしと。

⑩ 不見。曉風。隱之は雪寶の字、明覺は昭號なり、これは眞隱の風采を指出す、葉初開とは風の葉を吹くこえをきくと、此の行の時節に託す。

⑪ 賢侍者。木翁。名は紹賢、淨慈後録を編す。

⑫ 木曲。春風。珠云く、「きよくろくのまがり、わになるは、柱にも杖にもならぬ、ばか／＼しいなりふりじやかと、不用の老物じやと。」東嶺云く、「破參底を祝して頌じた木翁ゆえ春風花鳥と、春風は時をまがほにさへづる、鳥花さき、けれども世人は出世の開堂のときはぐけれども、賢侍者はさうでない。」

⑬ 年來。一任。年來は翁をいふ、無用は木をいふ、已上は三句みなこの意を述ぶ、世間は李白桃紅の、梅は清瘦のと、さま／＼吉凶榮辱の沙汰もあれども、かまはぬ從順無心の老翁じや故に。

① 不見隱之眞隱處、曉風凌露葉初聞。

賢侍者、木翁と號す。

② 泉曲輪囷貌似癡、春風花鳥自忘機、

年來老渾無用、二三任叢林鼓是非。

道彬侍者に寄す

③ 勃窣家風一任眞、述朱終是不成文、

何如竹榻吟清夜、月到花梢有幾分。

準侍者、歸省す

④ 山空木落岸雲輕、吹面霜風有幾程、

明月修江歸夢急、入門先祝老人星。

清禪者游方す

⑤ 金風露浥菊花秋、杞棘當途何處

游、衡岳康廬相撞著、恐伊未是汝

同流

珪禪者、石翁と號す。

① 道彬侍者。前佛事の處の鑑に出す。

② 勃窣、述朱。勃窣は威儀に拘らざるなり、今は質朴體教の容貌を取る、眞實にして華事なり、眞箇文質淋にたるなり以て侍者の道體を表す、生れ付きの本然の天眞にうまにかぜ、文字はそなわつても文華を好まず。

③ 何如、月到。これは怪んで隨る辭なり、言ふ意は此の人の如や質朴なり、どうして忽ちこの文ありて、花月に對して吟哦を事とするや、文質相交りて、道形を得るなり、幾分は、忠曰く、「夜分を言ふ、上の清夜の字を承くとあれども幾多分あるなり。」

④ 準侍者。名は道準、淨慈後録の編者なり、この歸省は虛堂老師を敬省するなり。⑤ 一二の句は歸郷の路程、霜後

の景物を述ぶ、嵐小嵐に吹きひさがれて、飯省の時節、一日や二日路ではない。

⑥ 三四の句は。脩は長なり、觀の壽節を祝す、とろ／＼とまどろむ夢にも、家に飯つたかと思つて、夢中に入り、門からよひ込む、母さまはおまめでござるかと思ひ込むのやうす。

⑦ 清禪者。彼は未詳なり。

⑧ 一の句は時を序す。

⑨ 二の句は杞は柳の類、水旁に生ず、眼前の杞棘一進を歩すべからずじや、祖師の關頭を云ふ、脚跟下宜しく精彩を著くべし。

⑩ 三の句は衡岳、康廬名利多しこれ行脚の地、相撞著とは那一人を表す、この虛堂の處ではゆるさぬぞと。

⑪ 四の句は未だこれ眞箇、汝が同生同死底の輩流にあらずと

① 逃空却外己蒼然、② 瓶水觀山得幾年、
③ 聞說聽經曾肯首、④ 老來無力補青天。

⑤ 瞿居士、無知と號す。

⑥ 遇緣觸境總茫然、⑦ 地闊天寬著那邊、

⑧ 一點既明超物表、⑨ 不知將底鑑偏圓。

⑩ 妙潔道人に贈る。

⑪ 妙心明潔契如如、⑫ 操履分明大丈夫、

⑬ 龐老家風殊不二、澆離高價許誰沽。

⑭ 廢寺

⑮ 入眼荒秦古殿秋、歲華遷謝沒人修、

⑯ 夜深靜聽風颯語、似屬檀那不點頭、

⑰ 越山

⑱ 翠螺簇簇繞湖濱、⑲ 塞影清磨古鑑塵、

四二四

① 伊は明眼の人を指す。
② 一の句は空劫は劫石の事を用ふ、蒼然は石の色に託して、老翁の顔の色を兼ねぬ。

③ 二の句は水と山との二者、皆便ち石にたよる、幾年を得たる老翁をいふ。

④ 三の句は珪璋者、講經を聴くの事あり、道生法師の石を聚めて、涅槃經を講ず、聞提も則ち有佛性と説くといふに至り、群石みな點頭すと。

⑤ 四の句、老來は翁をいふ、青天を補ふは、亦石をいふ、全篇石翁の二字に寄りせて、無心の義を形容す。

⑥ 瞿居士。無知は向上宗乘を主として號とす。

⑦ 一の句は吉に付き凶に付き、般若無知なるが故に、城縁に遇へば總是辯明するところなしと、茫然據を失す、今は眞箇の無知を表す。

⑧ 二の句は吉に付き凶に付き、般若無知なるが故に、城縁に遇へば總是辯明するところなしと、茫然據を失す、今は眞箇の無知を表す。

⑨ 一の句は吉に付き凶に付き、般若無知なるが故に、城縁に遇へば總是辯明するところなしと、茫然據を失す、今は眞箇の無知を表す。

⑩ 一の句は吉に付き凶に付き、般若無知なるが故に、城縁に遇へば總是辯明するところなしと、茫然據を失す、今は眞箇の無知を表す。

⑪ 一の句は吉に付き凶に付き、般若無知なるが故に、城縁に遇へば總是辯明するところなしと、茫然據を失す、今は眞箇の無知を表す。

⑫ 一の句は吉に付き凶に付き、般若無知なるが故に、城縁に遇へば總是辯明するところなしと、茫然據を失す、今は眞箇の無知を表す。

⑬ 一の句は吉に付き凶に付き、般若無知なるが故に、城縁に遇へば總是辯明するところなしと、茫然據を失す、今は眞箇の無知を表す。

⑭ 一の句は吉に付き凶に付き、般若無知なるが故に、城縁に遇へば總是辯明するところなしと、茫然據を失す、今は眞箇の無知を表す。

四二五

① 休問岡頭望夫石、② 人間恐有斷腸人。

③ 墨戲の屠生、老融が牛を善くす。

④ 草木傳眞筆力高、⑤ 戴嵩牛在「秋毫」

⑥ 此行莫擬天台去、⑦ 忍作孤僧過石橋。

⑧ 題「淨業圖」

⑨ 鍊行修身結佛冤、未會說著齒先寒

⑩ 老來不願西方去、樂得閑浮眼界寬

⑪ 慧靈が僧と爲るに示す。

⑫ 慧性何如見性通、⑬ 要教靈驗顯

⑭ 吾宗、⑮ 乘時颺下墜腰石、⑯ 笑捧

⑰ 衣盂繼祖風

① 三の句の岡頭は山の脊なり、望夫石は楚人の妻、望夫山に登りて化して石となるの故事。これは越山の縁に用ふ、向上の一著子に比す。

② 四の句、人間と人々自己、大死一番斷腸の時あらんと、凡夫のあさましさを嘲るなり。

③ 墨戲。墨筆を以て戲を作し、自在を得るなり、屠生は名なり、老融は偈頌に見ゆ。

④ 一の句は、傳眞とは眞に通るの意。

⑤ 二の句、戴嵩は徑山後縁に見ゆ、屠生は墨戲の妙を得る故に餘力を勞せずとなり。

⑥ 三四の句は、屠生が靈應を以て諸方に遊ぶを以て、今之を譽めていふ、汝等が境界ではないと、石橋や天台は已に上に委しく出づ、羅漢のまねは出来まいとなり。

⑦ 一の句は、傳眞とは眞に通るの意。

⑧ 二の句、戴嵩は徑山後縁に見ゆ、屠生は墨戲の妙を得る故に餘力を勞せずとなり。

⑨ 三四の句は、屠生が靈應を以て諸方に遊ぶを以て、今之を譽めていふ、汝等が境界ではないと、石橋や天台は已に上に委しく出づ、羅漢のまねは出来まいとなり。

⑩ 一の句は、傳眞とは眞に通るの意。

⑪ 二の句、戴嵩は徑山後縁に見ゆ、屠生は墨戲の妙を得る故に餘力を勞せずとなり。

⑫ 三四の句は、屠生が靈應を以て諸方に遊ぶを以て、今之を譽めていふ、汝等が境界ではないと、石橋や天台は已に上に委しく出づ、羅漢のまねは出来まいとなり。

⑬ 一の句は、傳眞とは眞に通るの意。

⑭ 二の句、戴嵩は徑山後縁に見ゆ、屠生は墨戲の妙を得る故に餘力を勞せずとなり。

⑮ 三四の句は、屠生が靈應を以て諸方に遊ぶを以て、今之を譽めていふ、汝等が境界ではないと、石橋や天台は已に上に委しく出づ、羅漢のまねは出来まいとなり。

① 淨業圖。淨土の業を修する圖。
 ② 一二の句は、修身録行、三世佛の宛ゆえにと抑下すその苦修なそのさたきくもいやになると。
 ③ 三四の句は、虚堂は願はぬ、西方などゆくことを、此を去ること遠からずじや、十方佛の淨土を聚めても、海の一漚のやうなもの、

この圓浮眼界の寛大さよと。
 ① 慧。行者なり。
 ② 一の句は慧の字を打すがくもんがたけもやくにはたぬ、只だ面目をしれと。
 ③ 二の句は、靈字を打す、修行は靈驗を得て見性し、則ち能く吾が宗を顯著せしめよ。

④ 三四の句は睡寢は行者なれば、虚行者の縁を用ひて見性の靈驗を述ぶ。
 ⑤ 四の句も傳衣の故事を引き來りていふ、この石は黃海の東禪に存すと。

偈頌後錄終

佛事後錄

侍者慧明編

① 咸淳元年三月十一日、恭しく聖旨を奉じて、宣して大内に入れて、普說せしむ、先づ 几筵殿に於て、
 ② 理宗皇帝の 靈輦を遷して、正殿に入れて、拈香せしむ。語録は師刊行することとを許さず。
 ③ 安孝垂慈契宿熏 鸞輿宮殿出金門、
 ④ 乾坤日月無光彩、艸木咸霑舊日恩。
 ⑤ 恭しく惟れば、烈文仁武安孝皇帝、龍鳳の姿、天日の表、堯仁舜德、世を濟ひ民を澤す垂衣端拱、四十一年、道を顯し明を繼ぐ、

① 慧明。前の偈頌に明禪者に示すとあり蓋しその人乎。
 ② 咸淳元年。是の年三月は淨慈に在り、八月二十五日徑山に入寺す、度宗は三月改元し、咸淳元年といふ、會稽の永穆陵に葬る。
 ③ 普說。棺前に於て。
 ④ 几筵殿。殯殿なり、「かりもが靈輦。兩手對して擧ぐるの車。
 ⑤ 理宗皇帝。景定五年十月崩す日本の龜山天皇文永三年なり咸淳二年十二月、建道備德大功復興烈文仁武聖明安孝皇帝と隆す、壽六十二。

① 拈香。對靈佛事なり、語録は理宗の言行に涉るゆえ、刊行し世に出すを許さず。
 ② 安孝。第一句は、隆號を打す宿世の靈習此の如き徳ある故に今能く之に契ふと。
 ③ 第二の句は、今喪車金門を出て、永穆陵に赴くと。
 ④ 第三の句は、天子の崩御のゆえ天地も日月も光彩なしとなげく。
 ⑤ 第四の句は、艸木までむかしの即位のときの恩にうるほふ。
 ⑥ 龍鳳之姿。これみな無爲治世の義前の育王録に見ゆ。
 ⑦ 垂衣端拱。ものしづかにゆつ

① 一十三葉、時康く物阜に、天清く地寧し。② 十方國土果圓に、一徑西天路活す。③ 千花足を捧げ、百寶身を嚴る。④ 空中の仙樂來り迎ふ、大地六種震動す。⑤ 今也次第に嚴駕を攀違し、春の行を奉重す。⑥ 一句無私、如何が語會せん。⑦ 深く紫檀を炷いて樓閣現す、百千の諸佛共に遊遊。

楊御藥

⑧ 聖旨を奉じて、毎月念佛の圖に跋せんことを請ふ。

毎月念佛の圖は、戒禪師の編する所なり、初一より、定光佛を首となして、三十日釋迦世尊に至る。終つて復た始まる、猶し貫華のごとし。⑨ 新新不住、念念不停、口に誦し心に思ふときは、光明發現して、人天の福

たりとなり。① 四十一年。治世の功徳をいふ先王の道、今王の明徳を顯明にす。② 一十三葉。三は恐らくは四の減なり、太祖より理宗に至りて十四世。③ 時康物阜。已上は生前の徳を歎す。④ 十方國土。已下滅徳の果を逃す、隨願往生をいふ。⑤ 一徑西天。單に安樂淨土を説けり。⑥ 千華捧足。千華は蓮をいふ。⑦ 百寶隨身。莊嚴無上の佛果。⑧ 空中仙樂。諸菩薩、諸天衆來迎す。⑨ 大地六種。今は成佛の瑞感。⑩ 今也次第。已下は大喪送の事を述べなごりをしきことかな、嚴駕は帝の靈輦、一足に送り出上る、攀は仰慕違は離なり。

をなす、此れ念佛精誠の感驗なり。然して月の小の日に當るときは、黃面老子、所念の處なし。若し遷つて初一日に在れば、則ち定光佛又念する處なけん。此を以て究竟し得去らば、無上の法王、常念の中に於て、巍然として動せず、瑞を現じ祥を呈せん。定光をして前ならず、釋迦をして後ならざらしめ。二六時中、三を抛つて兩と作して、喚び去り呼び來らば、普く大千に應じ、法界を統攝して、了に妨礙なうして、流通するに一任せん。眞に所謂功成り行滿つるものならんや。

都省董節使が起棺

「凛凛たる聲華禁闈を出づ、行藏多くは是れ天機に合ふ。圓明の定力人皆有す、妙得の心傳世に稀なる所なり、都省節使太尉董公、氣佛

といふ心に思ふは念佛なり、自然に光明發現す、人天を祝し、此は念佛の精進、眞誠の感應、靈驗であると。② 然而。これより已下は少しく議論を生ず。③ 趨在。散走なり、先へくりこす、送り出せば。④ 二六時中。忠曰く、「無上法王と前の定光後の釋迦とを三つとなす、又無上法王没して、定光釋迦の兩つと作る」と。或は提出して三と爲すも亦得たり、或る時は體を收めて兩と作すも亦得たり、二六時中とは、日々の二六時中に三を抛ち兩と作すの自在に一味を得たり、一時は動め一時は休するときは、晝三時なり、併し祖宗門下は數量の途轍に涉らざれど。⑤ 喚去喚來。佛號を喚び去り、來り、其の聲周遍、法界の群

生を統攝して捨てず、すべくつてしまひにはかけさはりなうして、天堂も地獄も一枚にこの末世に流通することもまよとなり。⑥ 功成行滿。念佛の功徳も成就し、菩薩の行願も満足するものといふべしと。⑦ 都省董節使。都省は育王錄に見ゆ、官太尉に當る、董は姓なり。節使は節度使なり。⑧ 一の句は、平昔の威名光華なり、出は起棺をいふ。二の句は行藏はたちふるまひ出處、天機は天理に合ふをいふ。三の句は定力をいふ、本來具足してゐるが、四の句は特に此の人を獲む。公の如き心傳を得て居るものは、世に稀有なりと、已上は生前の徳を逃ぶ。⑨ 氣吞佛祖。公の見性をいふ。⑩ 赤心奉上。赤心は忠誠の義、氣嚴霜よりもはげしく、かざ

祖を呑み、眼乾坤を蓋ふ、赤心にして上に奉ずるときは、則ち氣嚴霜よりも烈しく、禁庭に網紀たるときは、則ち風行き艸偃す。隋珠を絶し、趙璧瑕なし、人間萬事只だ許の如し、大笑一聲天地空す。今也溪山雲塢、處處逢迎し、水鳥樹林、互に相顯發す。只だ位を轉じて功に就くが如きんば、門を出づる一句作麼生。棺を拊つて云く、高空に月あり千門照す、大道人なうして獨り自ら行く。

塔せんことを請ふ。

劫火曾て烹る鐵面皮、從來放さず價頭の低きことを。有る時雲外に消息を露す、巖嶮たる門風到るものは迷ふ、某人、一生擔板、薑を咬み醋を呷ふ、佛眼も窺ひ難し。兩處

四三〇

りもだてもない。網紀。しめくくりとなる、風の行脚偃で下々に至るまで、命合に隨はぬはない。隋珠趙璧。此の如き人は、實に世に稀なれば、この威徳を珠のきずなきに比す。已上は生前を褒む。人間萬事。人も死すると云ふことは、しかたはないが、公が生死自在なるは、笑ひながら死す、此の兩句は活脱の機を遊ぶ。今也溪山。どこもかしこも、本米の面目、隨處に渠に對す。水鳥樹林。念佛念法と、節使が面目じや。轉位就功。これは洞上の宗唱なり、位は不動、功は動用、正位と偏位じや、今は起盡じやゆえ、忠曰く、若し生死に約せば、則ち死は功を轉じて位に執く者なり、本分處に飯入

するなく。

高堂有月。上に天堂なく。下衆生なし、大道一路涅槃門みな忘想の伴侶なし、獨行獨歩すじや。

湯。姓正言は官、徳和尚は未詳なれども、湯は擡越なり。

入塔。靈骨を收む。

劫火。第一の句は前來茶毘するをいふ、通身紅爛をしらねばならぬ。魔界佛界一時に火に燒き拂ふ、徳和尚の鐵面皮でも。第二の句は從來と第二義門に下らず、尋常行履、向上する處、妄りに人に許可せざる、價聲の低きをば放さぬ第三の句は雲の字に對していふ、さりながら無常の風にさそはれて、雲外に消息を露すとは、石塔となられた、塔は梵語此には高顯といふ。第四の句、峯の字を打して、巖嶮は峯の高きをいふ、生前此の

住山、時に止り時に行く、聖凡辨すること莫し。靖退して全く晩節を收む、縁に信せて來つて古橋に應ず。拍板未だ拈せざるに、大星先づ殞つ。今は則ち舍利流溢す、玉を剖つて斯に函にす。然も未だ音容を視すといへども争奈せん面目猶ほ在ることを。還つて見る廢。骨を提起して云く、窠堵婆の中收不得、無陰陽の地雲雷を起す。

徑山 荆叟淨慈の祖堂に入る。

餓狗絳綯古調新なり、年來奏して胡笳の曲に入る。韻は凌霄の最上層を出づ、聴く者和する者俱に足らず。天風吹き散じて西湖に落す、南岩の菱蘆春水緑なり。夜深けて相對して誰と共にか語らん、無位次の中列祖に陪す。

人の脚眼、しる人はなし、到るものは途路に迷ふと。

一生擔板。大法を荷擔して名利をふりかへりみもせぬ咬薑叩簡は法の爲に辛酸を喫するをいふ。

兩處住山。一處は雙林、一處は考ふべからず、其の中、受用秘密の故に。

時止時行。行止時に臨む、誰か聖凡を辨せん。

靖退全收。隱退して、安老縁にまかせて請に應ず、みな理の當然、古橋は雙林寺なり。

拍板未拈。拍板は傳大士の持する所、これは雙林に住する幾くならずして入寂するを云ふ。

舍利。此には骨身といふ、玉のはこを製して舍利を盛るなり。

來見音容。虛堂は未だ其の人を見ざるも、眞身舍利現存す

窠堵波中。此の舍利は本地法身の故に、無陰陽の地、劫外の別境界、收不得の面目、雲峯の活用たる雲雷を起すと、成風の巖然たるをいふ、此の佛は寶林の後縁に入るべきなり。

荆叟。名は如狂、癡鈍頭に嗣ぐ、頭は或老體に嗣ぐ、即ち圓悟の玄孫なり、これは入牌の語。

第一句は或菴の語を擧ぐ、絳綯は狗をつなぐの繫索なり、懸くるに金鈴等を以てす、古調新なりといふ、古調ゆえききわけにくい、説法の妙音に比す。第二句はその曲、傳へ來て胡加の曲は吾が道に比す。第三の句は凌霄の唱へ起す。第四の句、不足はとどかぬ、飽きたらぬなり。第五句は入牌

の端的、淨慈は西湖の上にある、故にいふ。第六句は、南宕は南山淨慈をいふ、宕は山の過高なり、菱、蘆はまこもあし、今入牌のとき、

蘆生水線、景物愛すべし。第七の句は、夜深は正位を表す、此の句問起夜深は正位をいふ、入牌の後を叙して、次の句を起す。第八句

は無位の真人、上諸佛なり下衆生なし、陪列祖は堂中に中間入りさせる。此の佛事は淨慈の後録ならん。

佛事後録終

秉炬

師觀書記

① 閩山は青く浙水は碧なり、去住悠悠々として影跡を忘す、急ち秋觀に従つて禪衣を整ふ、知らず天地誰か相識、相識あつて準的なし。南山の爐竈正に炎し、偏看よ是れ甚の火色ぞ。

可拱藏主

② 進んで趨り、拱して立つ、五千餘卷、詮註し及ぼさず。沐浴して衣を更へて意に信せて行く。道人瀟灑として笠笠なし、火も燥さず、水も濕さず、鐵壁銀山、者裏より入る。

③ 東山の秀老、小師一侍者の爲にせんことを請ふ。

師觀書記

① 師觀書記。觀公は淨慈の書記たり、故に浙水南山の言あり。第一句、閩山は福州、浙水は杭州なり、觀公生前の遊歴地をあげ、生前行脚底をいふ。第二句は、本色の行脚、故に去住無心、高踏の人。第三句は勤の字を打す、今幽途に趣くが故に、この僧秋に死する故に、秋觀といふ、周禮に春見るを朝といふ。夏見るを宗秋見るを觀といふ。涅槃の都に赴くなり。第四句、不知天地を問を起し、決して書記を知りてかない。第五句は、此の相識、那一人故、準則正的なしと、この準は暗にいふ、無準に參じたる人ゆえ。第六句南山は即ち淨慈、四邊觸るべ

からず。第七句は、此の火は青黄は白黒にあらず、何の色ぞとなり、準的はよりつき手がなかり。

可拱藏主

② 第一句は、拱の字を打す、眞箇の境界なり。第二句は藏主の縁を用ふ、進止無心應緣の故に、蹤跡の註すべきなし、如上の境界は、とてもとて。第三、第四の句は、此の行脚涅槃の跡に趣く、故に尋常所用の具もなし、適然として脱去す。第五句は、これは土葬なればかくいふ、本分の上にて、直歸趣を示す。第六の句はその端的は自己元來鐵壁銀山とは精神を抖擻して關を透り去れと、直下底の消

一呼すれば便ち傾ず、終に他の國師に孤かす
再喚すれども回らず、砥だ程を貪ること太だ
速なるが爲なり。春雲乍ち斂つて宿雨初め
て收る、火焰裏に身を轉得し來る。鉢袋子付囑
して在ることあり。

● 本然侍者

清淨本然、臭煙燧燐、兩重の關を抹過し
て、遼天の鶴を放出す。然侍者、將に謂へり、
吾れ汝に孤負すと、汝元來吾れに孤負す。
偷眼にして涅槃臺上より望めば、果然として
死工夫を做し得たり。

● 潮州の 本植禪者

鰐郷枯瘠の人、悟り得て心訣を傳ふ、無根樹
子、一植すれば便ち活す。知らず寒影誰が邊に
か落つ。但だ覺ゆ腥風の天末より起ることを。

植禪者 甄別することを休めよ、爐に當つ
て熱鐵を避けざれ。

● 徳圓堂主

行徳ならず、規圓ならず、死は則ち活し、病
は則ち瘥ゆ。寸心多くは藥爐の邊に在り、誰か
委悉せん。實に言ひ難し、無明火裏に、佛祖の
冤を雪む。

● 居靜副寺

靜を以て心を照す、日中に影を逃る。空を
以て妙を觀す、大夢方に省す、萬里の岷峨片
雲を飛す、何ぞ月の千峰に到るに如かん。靜副
寺、孤迥迥、火後の莖菲、點著すれば便ち
領す。

● 至義禪者

法堂を背いて艸鞋を著けて去る、衲僧義斷

息をいふ。ゆきたいところへ
つうとゆけじや。

● 東山透老。傳未詳なり。

第一句は、一の字を打す、天堂
も地獄も一呼につき破つた、
他の國師とは侍者の縁を用ふ
豐利の故に、三喚に及ばず、
終に他の忠國師の慈意に孤負
せずと。第二句は、臨死の端
的じや、喚べども回らぬ、今
急に涅槃の途程に越く故に。
第三四の句、時節の風物を序
す、これ現成天眞の理を示し
又大火聚の如くじやほどに、
能く合點せよ、眞箇の鉢袋子
を付屬してあるぞと、これ秀
老の小師の故に、五祖の前身
義松道者の縁を用ふ、付屬、
汝を待つことありとなり。
● 本然侍者。傳未詳あり。
● 第一の句は名を打す、此の句
は初聲の回に出づ、清淨一重
なり、燧燐は煙の起ること、

全身火熱の故に、臭燧一重。
第二の句は、清淨本然、臭煙
燧燐の兩重の關をばとほりす
きて、鶴の欄を脱して、遼天
に飛ぶが如く、解脫自在を得
んと。

● 吾孤負汝。忠國師の侍者の縁
を用ふ、遠く去る故にいふ。

偷眼。冷地裏にひそかに見れ
ば、はたして涅槃臺は茶毘所
から、今究竟無心にして生氣
なし、故に死工夫をなすとい
ふ。

● 本植禪者。未考。

第一句は鰐郷は潮州なり、瘠
は瘦なり、修行苦辛の人を形
容す、此の人枯骨の形相じや
が、心訣を悟り得ると。第二
句は、無根樹子とは別生匪を
いふ、本地の物色なり、一植
便ち活すとす、名を打して靈
利快活を表す、第三句は寒影
字は樹の字より來る、彼の樹

影はどこへゆきしぞと、無根
の故にいふ。第四句はさりな
がら、腥風とは鰐郷の人なれ
ば、天末とはほき國の潮州府
なればなり、本分家郷の道風
吹き起り來ることを覺ゆと
なり。
● 伐虱別。虱は瘥なり、明なり。
上の彼此を甄別せよと云ふに
はあらず、今は只だ妄想分別
をやめてと云ふ意なり、差別
するなり。

● 當爐熱鐵。即今大火焰裏、不
レ用ニ廻避ト。

● 徳圓堂主。延壽堂主なり。

第一句は徳圓の名を打す、小
行は大徳にあらず、器規は眞
箇の圓にあらず、人々本具、
盤に和して托出し來れと。第
二句は古今死んだものはない
徳ならずんば則ち行にあらず
圓ならずんば規に非ず、活す
るときは則ち死にあらず、瘥

ゆるときは則ち病に非ず、今
翻轉して恁麼に遣ふは、都來
理の本法を示すなり。第三四
の句は、その行業に托して守
るところの純眞をいふ、是の
如くの隱徳誰かしり手がある
まいと。別句は無明の火はな
ほ無焰火のごとし、無明煩惱
の火をいふにあらず、雪佛祖
冤と、私も祖師もなにもかも
やきぬいたとの機用、これ下
炬の好話。

● 居靜副寺。傳未詳なり。

第一句は靜の名を打す、默照
邪禪は眞箇の活處なきを云ふ
日中透影は至りて愚なりで、
皆これ造作の故に、解脫の法
に非ず、たとへば日中に影を
のがれて、疾走して陰に處す
ることを知らざるが如し。

第二句は空を以て妙を觀すと
は、所謂正觀なり、徳山の云
ふが如く、汝但だ事に無心に

じ情忘す。方を觀て彼に去ることを知る、彼に去つて方に至らさず。轉じて南山の爐竈に入る。自己の靈光を守らす。數莖の枯骨天地を撐ふ、一葉の扁舟に大唐を載す。

惟一知客

惟此一事實、餘二即非真、洞然明白、猶ほ法塵に落つ。自己の禪只だ參すること半夏行脚の眼帯び來ること幾春ぞ、且つ寒爐に向つて石火を敲く、須ひす茗椀來賓を驗むることを。

暫到の如是禪者

四大部經に背得して、到頭如是を識らす。己を虚しうして南屏を扣く、門に跨つて先づ旨を領す。火聚刀山等閑に當つ、去來秋風裡に在らす。

凌霄峯の念庵主

正念現前、七顛八倒、拳頭を豎起して賓主分る。人を驗むる眼活して鷹鷂の如し、閑の時禪淨照に非ず、凌霄峯頂雲を看る人、天寒うして者の爐竈に入らす。

祖秀老宿

之を得ること豈に衣盃にあらんや。南能北秀に賽過す、胸襟空洞として物なし。人を導くこと諸己より出づるが如し。正邪の如く活、死の如し。一箇無繩の苜蓿翁、莫教あれ觸著すれば無明起る。

如松禪者

夜來の好風、門前一枝の松を吹き折る、南よりし北よりし西よりし東よりす。破頭山下雷同せず、枝枯れ葉墮ちて臘盡き歲窮

心に無事ならば自然に虚にして、空にして妙ならん、故に云ふ生死の大夢、方に忽ち省覺すと。

第三句は、岷山岷山は蜀の嶺眉山、靜觀寺の生緣は蜀なり片雲の飛ぶ如く、行脚して來た、去留無心、千峯關は淨慈にあり、千峯の月に參見するなり、會得すとたり。

孤題々。危遠にして近くべからず。

火後煎茶。煎茶は松月なり、茅は俗に茹に作る、點著とは松明へ火をつくと、そのまま領ず呑み込む、般若の火災を舉するによりてなり。

至義禪者。傳未詳なり。

第一句は、徳山の越山に到るの緣に、此の事跡あり、今急に涅槃に赴くゆゑに。

第二句、納僧僧云は、義の名を打す。情義斷忘は入寂の名を打す。情義斷忘は入寂の名を打す。

義なり、眞簡の至義なり。

第三句は、諸に歸著の方を視る、一面目を見たところ、本命元辰、下落の處。

第四句は、即今行脚未だ歸著の方に至らずとたり。忠曰く「彼の眞簡の去處に去り了りて看れば、則ち元來方所に至るべきなし」と、蓋し文中子の字を用ふと。

第五六句は、方に至らざるが故に、回轉して淨慈の爐竈に入りて、假鍊に遇ふて自己方を觀する底の靈光を守らずとなり、球云く「今ひつくりかへして、淨慈南屏山に於て茶毘に就くとたり、これまでは生前底。

第七八の句は著語なり、大小一致、不思議、解脱の活用、著語して還繩底の端的をいふ。

惟一知客。傳未詳なり。

に云ふ須ひすと。

如是禪者。傳未詳なり。

第一句は、四大部は未だ名目を審にせず、五大部の大乗經の内、法華涅槃、一時の故にいふか、背得は書を背後にして誦するをいふ、誦誦なり。

第二句は名を打す、背得して識らずとは、禪者の機用なり如是は經首みな云ふ。

第三句は、自己の見解を虚しうして、餘心なく參扣するなり、南屏は淨慈をいふ。

第四句は、恰利の漢、わづかに門に跨つて、早く深旨を領ず、俊快の暫到を嘆ず。

第五句は、三塗地獄に入りて同觀に遊ぶが如しと、故に等閑といふ。

第六句は、益亡すること秋風の時なり、今言ふは本分行履の暫到の故に去來時節に拘はらず、已上は淨慈の後録。

る。① 雪霜を磨洗して冷に禁へ得たり、② 者回方に覺ゆ煖烘烘たることを。

惟曉直歲

星を戴いて耕耨するは、何ぞ叉手して鋤を挿むに如かん。破曉命を焼くは、田を栽ゑて飯に博ふる似りも勝れり。制に近うして急に單子を抽んづ、是れ本色の道流なるべし、更に若し喚べども頭を回さず、火焰汝が爲に説法せん。

妙蓮上坐

水を出づると未だ水を出でざると、消僧未だ舉せざるに先づ知る。子あれば房あり、動著すれば人の牙齒を礙ふ。半池霜に倒るることを論ずることを休めよ。且く看よ、綠影の波に浮ぶことを、如今移して火中に向つて栽

① 第二句は名を打す、二大老の衣蓋を争ふの機に報對す、言ふ意は争はざるなり、賽過はかへりまうす、勝過なり、與奪はその人に還しておく。

② 第三句は、圓なること太虚に同じで、洞も亦空なり、これは自覺なり。

③ 第四句は、利濟親切に、學者を導く、骨肉を分るが如し、これは覺他なり。

④ 第五句は、邪正一如、死活不二の活境界、佛祖も辨じ難き境界。

⑤ 第六句は、きづなをくひ切つて男じや、蜀人の放蕩をいふ蜀の生縁か。

⑥ 第七句は、いちぢりだてをする、したゝかな目にあふ、無明の火起火葬、故にいふ。

⑦ 如松禪者。傳未詳なり。

⑧ 第一二句は名を打す、此の兩句は南泉の語なり、吹折は送

う。劫外の香風來ること未だ已ます。火把を擲下して云く、「葛藤を要することを休めよ。」

樹頭の祖用

黄梅、腰間の石を墜さず、鄮嶺惟だ雨を帯ぶる松を栽う。四十餘年今驗あり、長長短短、用窮りなし。祖衣未だ手に入ることを得ず、萬縁先づ以て頓に空す。無柄の鏝頭何れの處にか著けん、一時に分付す丙丁童。

亡をいふ。

① 第三句は、夜來の風の四面より來るをいふ、生死無常の風に吹かれぬものはない。

② 第四句は、破頭山の栽松道者の縁をいふ、不甯同は破頭山は松を栽えて建立邊、今日は風松を折る、掃蕩邊故に彼と同じからずとなり。

③ 第五句は、生死到來のときなり、松の字に當て、死滅の體を云ふ。

④ 第六句は、この句は修行底を云ふ雲辛霜苦底なり、これは松を云ふ。

⑤ 第七句は火葬の體、烘々は燎なり、火物を乾すなり。

⑥ 惟曉直歲。傳未詳なり、直歲は作務を主る、又田圃及び莊舍の事をも掌る。

⑦ 第一句は、仰山の縁。頌古に見ゆ、曉に出て夜入る、何如は「くらぶるではない」なり。

① 第二句は、地藏の縁、徑山後錄に見ゆ、命は山畑など、已上はみな直歳の所務に寄せて佛事を作す。

② 第三句、制は佛の夏制、抽單は即ち起單請假なり、他方世界行くを云ふ、本色の道流は、圓覺の伽藍に住せず、三期の禁制を守らざるが故に。

③ 第四句は、單子を抽つる上によれまて聞いてくれぬかと、火焰は下炬の縁、本雲門の語なり、頌古に見ゆ、今古不變底のものであるぞよと。

④ 妙蓮上坐。傳、未詳なり。

⑤ 第一句は、蓮の字に託して、全く説き出す。

⑥ 第二句は、子は蓮實、房は蓮房なり、これ必然の理に喩ふ。動著は「やゝもすれば」なり、義輕くみよ、箇の實食することを得ず。

⑦ 第三句は蓮華に託して、死滅

底を云ふ、霜倒は死を云ふ、且看は舊に依りて、上坐の面目尙ほ儼然として在りと。

④ 第四句は如今一轉して、火窟に向つて火中の蓮じや、不徳の故に香風已まずじや。

⑤ 著語の休要、葛藤は從前の閑絡索を放下して、とくに會せよとなり。已上は蓋し徑山の後録ならん。

⑦ 樹頭祖用。栽樹を以て業となす、祖用は名なり、未詳。

⑧ 第一句は、慮行者の六祖の苦辛を用ふ、邵嶺は即ち青王なり、樹頭の作務する所なり、嗟は「ぶらさげる」なり、落には非ず。

⑨ 第二句は、苦辛栽培するの功ありて、其の用處に随つてと、用の字を打す、長木短木は年來の功驗なりと。

⑩ 第三句は、祖衣とこれ又慮行者の傳衣の故事を用ふ、祖の字を打す、未だ衣法を傳へず、早く萬緣空す「無心の境界に到るなり」、是れ入寂を表す。

⑪ 第四句は、無柄の樹頭、平生所持の鐮頭、今は化する故に、彼れ是れやかましくいはずに、丙丁童にくれてしまへと。已上は青王の後録ならん。

秉炬終

法語

① 高麗國の淑法師、藏經を印す。
 ② 石の玉を含むが如く、精鑑するに非ずんば焉ぞ能く其の眞を識らん。道は己躬に在り、苟も外に求めば、以て其の妙に適ひ難からん。
 ③ 之を鑑むることは精しきにあらざれば則ち隱微なり、之を求むること敏にあらざれば則ち溟滓なり。道の源を明め體めんと要せば、朝夕にして之れを求むべきものに非ず。故に我が竺士の老師、志を守ること堅からず、萬乗の尊榮を棄て、六年の饑凍を受く。臘月八夜に於て、忽ち明星を觀て、艸座を離れずして、不思議の境に入る。一大藏の葛藤を説い

① 高麗。三韓の内、高句麗ともいふ。
 ② 印藏經。大藏經を板行にするなり。
 ③ 如石含玉。喻を起す、これは繁山の語、青王録に見ゆ、精定鑑察、目きゝが大事、眞とは見ちかへればむだ骨じや。
 ④ 苟外求。珠云く藏經に付いて求ては時はあかね、其の妙法に適しがたい。
 ⑤ 命鑑之弗精。喻を承く。
 ⑥ 求之不敏。法を接す、溟滓は混茫のこと、うるくじや、その本を究めよ。
 ⑦ 要明體道。法は結歸す、朝夕は一朝一夕なり、容易に求むべけんや。

⑧ 守志不堅。その證下に在り。
 ⑨ 棄萬乘尊。出家。
 ⑩ 不離脚座。吉祥觀紳。
 ⑪ 入不思議。成道なり、正覺の眞界思議すべからざればなり。
 ⑫ 籠絡天地。珠云く、「如來の法道は廣大なり。」孔子ば一陰一陽を以て之を道といふ。
 ⑬ 從他影子。法輪を轉ず。
 ⑭ 三賢十聖。十住、十行、十回向を賢となし、十地を聖となす。妙覺は佛なり、世尊の所説に傾かず。
 ⑮ 拱手。歸降の容なり。
 ⑯ 報君觀風。君臣父子の間も、この佛法が手に入るとあつくなる、浮虚を鎮服し、僞妄を去つて、ひそかに人しれず、

て、天地日月を籠絡し、陰陽造化を包括す。有情無情に於て、總て他の影子を出づること得ざるを致す。三賢十聖心を傾けずといふこととなく、外道天魔、悉く皆手を拱す、以て君親に報じて風俗を厚うすべし。浮を鎮め偽を去つて、潜利陰益するもの多し矣。末後に却つて道ふ、始め鹿野苑より、終り跋提河に至るまで、是の二中間に於て、未だ嘗て一字を譚せずと。可煞だ漏逗す、茲れより關鑰嚴ならず、便ち見る殊方異域、赤縣神州、海藏金文、處として有せずといふことなし。豈に一微塵を破つて、此の經卷を出す而已に止らん哉。高麗の淑法師は、竺土老師の眷屬なり、宿熏既に深うして、海に航して來る。遠く一身を致して、十藏を滿せんことを願ふ。

天下治つてまゐる。三賢已下所披の得益を述ぶ。前後。涅槃に臨むとき、これは前の法語に詳なり、未嘗譚一字と、楞伽の所説なり可煞漏逗すと、既に不説の眞説を備する故に。從茲。結集の後なり、已下正しく藏經の事を説く。海藏金文。龍宮海藏を稱す。微塵。これは華嚴經に云ふ、全く一微塵の中に在りて、時に智人あり云云。已上は法通を述ぶ。高麗淑法師。已下は正しく印藏の事を説き出す。宿熏深。宿世佛の眷屬の故に薰習既に深し、高麗より宋に來る、致は委ね致す、送詣なり、獨り遠方より來り、藏經十部を滿印し。經を印する本志を述ぶ。遍尋知識。且又經中の深義を

請益す、總條は「ひも」「くゝるひも」「阿字門は四十二字の初なり、一切の法初不生なり、五千餘卷、すべてこれ切開則ち字脚のみとなり。因。機用なり、不意に發する聲なり。忘却老僧。老僧が指示の恩を忘るべからずとなり。當能より已下、心宗の旨要を説じて結ぶ。景定癸亥。理宗の朝、四年なり。四明雪竇。行狀を按ずるに、晩景に迫り、明覺塔下に退き、終焉の計を作すは、蓋し此の時作するのみ。雪蓬明長老。久參の人ならん。禾興は嘉興府の報恩光孝禪寺なり。東山。師、育王退院の後、栖霞に住すとあるも、誤りなり虛堂蘇州の東山に客居す。

風霜を綿歷して、其の志愈篤し、逼く知識を尋ねて、未だ聞かざる所を求む。儘し能く未だ經條を展べず、此の阿字の法門に入らば、則ち五千餘卷、總て是れ切脚ならん。且く道へ箇の什麼の字をか切する、因慕然として眼皮綻びば、老僧を忘却することを得ざれ。宋の景定癸亥、秋八月、虛堂叟、四明雪竇の西菴に書す。

雪蓬明長老、禾興の光孝に赴く。雪蓬明老相從ふこと日あり、育王より東山に過る、客欄の下、温然として春の如し、此の老の力なり。南屏に在つて第一座に居れり、忽ち澱湖より公選の寵あり、二年にして復た雙徑に勝集す仍つて第一座に歸す、羣心歡如たり。今朝命を領じて、還に禾興の光孝に赴

客。主客相見の上。在南屏居。虛堂八十歳の景定五年甲子、淨慈に住す、明公時に第一座に居りしなり。澱湖公選。松江府の澱湖、同じく澱山は府城の西北六十里にあり、公選は公界より此人を選して居らしむるなり。二年復雙。師の歴遷の次第は育王、栖霞、淨慈、徑山なり。已上は舊日の好を述ぶ羣心は大衆一同。據。舒なり。阻行。餽行なり。已上は送行の儀を述ぶ、上に通じて法語の序なり。卓錫無地。此の人の行履は山河大地、此の長老のはらの中を云ひ、しかし此の如く把住綿密なりと雖も、徒に眼乾坤を蓋ふ底の氣槩を餘すなり。鐵笛橫吹。無孔の鐵笛、家傳の無語の曲を唱ふ。

雲夢潭。文選に「雲夢は方九百里」と、已上は明老の用心快活なることを嘆ず。煙波渺々。海を舟行して光孝に赴く路程の景色、依々はたをやかにこぎもてゆくなり、柔弱なり。雪簷霜葢。路程寒寂の景象、しもがれどき、冷相宜しとは此の人の胸中澄みのぼつたけしき、揚は壇なり、簾幃を掲開してじや。已上は澤國の嘉興に赴く途中の景を述ぶ、言ふ意は境に對して無心逍遙。鷺湖深處。これは垂手を勞せずして、自然に好學人を得べきをいふ、鷺湖長水江はみな嘉興に在り。已上は彼に到りて、衆を接して自ら力を費さいるを述ぶ。風飄々水。已上は送行の意を述ぶ、聲詩も亦送行の詩なり。成淳。度宗のとき、戊辰は四

く、岐に臨んで聊數語を 擲べて、以て
 祖行に當つ。卓錫地なし、空しく雙眼を餘
 して乾坤を蓋ふ、鐵笛横に吹く、氣あつて
 雲夢澤を呑ます、熾波渺渺、蘭棹依依たり
 雪蘆霜草冷ふして相宜し、幾度か掲開して
 関に月に對す。鴛湖深き處、必ずしも絲を垂
 れず、長水江頭錦鱗自ら得たり、岐に臨む句子、
 如何か分付せん。風飄飄として兮衣を吹く、
 水冷冷として兮詩を聲す。咸淳戊辰秋九月、
 虛堂老僧、不動軒に書す、是の年八十四。
 日本、建長寺、隆禪師の語錄の跋
 宋に名刹あり、自ら蘭溪と號す、一節高く
 岷峨より出で、萬里 南のかた吳越を詢
 ふ。陽山に旨を領じて、到頭 無明を識
 らす、脚を擲ぐるごと千鈞、肯て松源の家

年九月。
 不動軒。徑山の方丈なり。
 八十四。師の遷化の前年なり。
 建長寺。相模鎌倉五山の巨
 福山なり。
 隆禪師。蘭溪道隆は西蜀涪江
 の人、姓は丹氏、陽山に屆り
 て無明性禪師に嗣ぐ、宋の淳
 祐六年を以て、商舶に乗じて
 太宰府に著く、本朝の後深草
 天皇寛元四年丙午なり、北條
 時相平公建長禪寺を創め、開
 山說法せしむ。忠曰く、「この
 後錄、都て四卷、久しく世に
 顯はれず天和二年壬戌二月、
 約翁倫和尚語錄と一時に刊行
 す、時に吾れ聞く、南禪僧錄
 完長老、建長寺に於て地を堀
 りて一壺を得たり、壺内に二
 錄を得と云ふ。
 岷峨。蜀人の故なり。
 南詢。無準、巖絶、北嶺はみ
 な標山に住する故、之に參ず。

四四四
 陽山。吉良府にあり。
 無明。松源岳に嗣ぐ、虛堂法
 の淵源に徹した故、是の如く
 いふなり。
 擲開。松源の三轉語なり、千
 鈞は重くして擲ぐる能はずの
 謂なり、無明を識らずとは深
 旨を領すればなり。擲開千鈞
 とは家法をふむなり。己上は
 平昔遊方、悟道用處深密なる
 を述す。
 乘桴于海大。論語の句をとり
 用ふ、桴に乗つて海に浮ばん
 云云と。
 淵默雷聲。無説の眞説を表す。
 無一物の處、無盡藏。
 三輩半千堆席。三たびは建長
 建仁、壽福なり。堆席は英堆
 の法席。
 遂成簡僻。應機設教歲月久し
 き故に篤を成すなり。己上は
 行化及び語錄の成るを述ぶ。
 忍禪人。蘭溪の門人の故に二

法を踐む 桴に海の大なるに乗じて、日本國中に行く。
 三たび半千の雄席を董す、之が歲月を積みて、遂に簡編を成す。
 久しく雪庭に侍す、遠く四明を訪ふて梓に侵む。言不及の處、務めて
 正脈流通して、用盡くる時なからんことを要す。切に忌む 林に望
 んで渴を止むることを。
 雪峯の 霜林果禪師の語錄の跋。
 大慧下の 尊宿、足陌多きことを尙ぶ、虎丘下の子孫、省數多きこ
 とを尙ぶ。足陌は之を使ふに限あり 省數は之を用ふるに窮なし。
 罵天翁、三傳して霜林に 之る、萬木正に凋落するに當つて、鬱然
 として興起す。此れ蓋し省數を擲にして之を得ればなり。善く是の錄
 を觀んもの。以て 其の堂に陞るべし未だ其の室に入るべからず。

祖得法の事を用ふ。宗派下に
 はなし。
 遠訪四明。師が明覺塔下に退
 居するの時なり。
 言不及處。大事因緣、言漏語
 端を離るゝ底。
 正脈。松源の正脈なり。己上
 は語錄、宋に入れて流通する
 ことを述す。
 望林止渴。これは喩を設けて
 戒を含んで結ぶ、世説に「魏
 の武、軍士大いに渴して水な
 し、令して曰く、前に梅林あり、
 渴を止むべし」と今は法
 味を嘗むべしとの喩へなり、
 此の法は冷暖自知でなければ
 いかぬほつばら一ばい水を
 呑んでこそ渴を止る。
 霜林果禪師。妙峰善の法嗣、善
 は佛照光に嗣ぐ、大惠三世。
 尊宿。他を敬して云ふ。
 足陌。放行門、長百。「レソ」
 の解は徑山後錄に見ゆ
 省數。把住。九六百。七十七官
 四四五

錢八十を納る、この二語前に見ゆ。
● 風天霜。大惠なり。
● 之。至るなり。
● 萬木正當。宗風のさびしきを表す。
うつ然興起すとは、嗣宗を振起す。

この兩句は霜林の二字に合ふ。
● 此蓋。足陌の家にして、省敷の受用をとり行ふゆえより兩家の體に透る。
● 隨其堂云。隨分親切に參ぜよ、

そのおくざしきに入るべからずと、未だ其の奥義を知るべからずと。論語の先述に「子曰、由也、升レ堂矣、未レ入ニ於堂也」と、注に「入道の次第に喩ふ」とあり。

法語 終

眞贊

① 應遠の俊長老請ふ

● 老いて死せず、心未だ灰せず、觸著すれば惡發す、青天の怒雷、虎頭燕頰を引き得て、叢林の禍胎を競ひ起す。點著すれば便ち領す、何ぞ甚れ俊なる哉。

② 淨潭藏主請ふ

● 容易に人を肯ふものは、與共に語り難し、竹篋頭之を惜むこと金の如く、禪牀角之を委つること土の如し。淨潭藏主、善く機を知つて、電光影の裏、賓主を分づ。

③ 以文長老請ふ

● 天地不仁、此の妖恠を出す、偷營劫寨の機

④ 慶遠俊長老。寶林錄の編者なり。

● 第一句は、虛堂八十五歳。第二句は衆生の利益の心、やけぼつくひに成つても、此の心は火氣滅盡せず。第三句はきぶい老僧じや。第四句は惡發する底じや。已上は眞相老いて益々壯なるを述す。第五句は封侯の相なり、今は作家の漢を稱す、出格の學者暗に俊長老をいふ。第六句は、五逆の兒孫生ずるの意、わざはひのはらごもり、叢林のやつかもの。第七句は點とは眼を點するなり。第八句は贊を請ふ人の名を打す。引得てより已下は俊公の徳を美む。

⑤ 淨潭藏主。師の門人か。この畫像のこと、日本では一休和尚年譜、長祿三年己卯の條に師年六十六、或る人虛堂祖翁唐本畫像を賣る、上に自贊ありと、この語を載す、休子(歌叟)、半金購ふて酬恩常住に捨つ云云とあり、一休和尚は虛堂の再來なりといふ、故に感得の事を此年譜に書しあり。

● 酬恩卷は山城國綴喜郡薪村にあり、一休和尚の御塔を存す。
● 第一二の句は、忠曰く、「凡そ宗師、濫りに今許可するものは、共に此の道を語るべからず」。第三四の句は、竹篋は來學を接するの器なり、之とは、竹篋を指す、金を惜むが

あつて、喜捨慈悲の戒なし。⑤正脈將に沈まんとす、法門凋瘵す、⑥如何が嗣續して、松源の派大ならん。⑦奸難の後越に精神、罵人の毒毒蜂蜚の如し。

⑧新に淨慈の天錫莊を建て、請ふ。⑨期せずして會し、約せずして同す。晴光燦燦、和氣融融。

⑩兩朝の聖主に際遇し、徹廟の禪叢を中興す。⑪良田天より錫ふ、平にして砥の如し、靈苗の歳歳、豊なるに坐對す。

⑫徒弟宗璞、⑬施水庵を建て、請ふ。⑭等しく是れ慈を垂る、初めより門戸なし。⑮玉既に分る兮、觀つんべし、梵儀頓に擧ぐ兮、觀難し、凌霄峯頂雲を看る人、普化堂中第一祖。

日本の ① 紹明知客請ふ。

② 紹既に明白、語、宗を失せず、③ 手頭簸弄す金剛栗蓬、④ 大唐國裡人の會するなし。又却つて流に乗じて海東に過ぐ。

⑤ 磻溪の禪子請ふ。

⑥ 怒氣人に嘔く、殊に犯すべからず。蓋膽毛ありと雖も、且つ人を驗む眼なし。是も亦刻り非も亦刻る、牙關を咬定して、一生擔板。

⑦ 光禪者請ふ。

⑧ 初めて欣び、久しうして厭ふ、明月夜光、多く劍を按ずるに逢ふ。但だ信得及せば、自ら靈驗あらん。

⑨ 無則都寺 玉儿にして、予が夢影を寫す席を散じてより後、言音相接せざるもの十二年、今徑山に上つて贊を請ふ。筆老い墨

の妖怪ありと、この虛堂のやうな。

① 第三四句、は譽は單邊なり、却是剛掠なり、譽は譽と同じ疊なり、法藏場中の大將の氣雄を云ふ、喜は樂を慶び、捨は冤親平等、慈は能く樂を與へ、悲は能く苦を抜く、偷却の毒機あり、四無量の戒島なし。

② 第五六の句は、此の老僧力を盡くせども、佛法の正脈はだんく、調は傷、察は病、やましきばかり。

③ 第七八の句は、これは畫像に對していふ、派大ならんとは以文長老、その人なり。

④ 第九十の句は、奸難後と師の育玉に住するときの難あり、越は愈なり、いよ／＼精神を増す、只だ霜辛雪苦、骨を折れ、罵人の毒毒と悟つたやつも迷ふたやつも。とらまへて

如しとは、點滴も施さず、人も法もじや、來學の身を轉じ氣を吐くことを許さず。一向把住するなり。第五句は之とは亦竹篋を指す、委つること土の如しとは、ある時は竹篋を以て、禪床角に掛けて用ひず、之を棄つること土塊の如くし、學者の言句往來を許すと成り。これは放行なり。この寫照は竹篋を把つて禪牀に據るの圖なり。第六句、機とは宗師の密機、則ち把放なり、上の情むと委つるを云ふ。これは虛堂の知音底。第七句は間に爰を容れざる頓機靈利。これみな印證の言なり、實は畫き出す底の色相、主は眞の妙相。

⑤ 以文長老。續輯の編者なり、即ち知る、師の門人なり。

⑥ 第一二句は、妖怪は寫照をさす、天地不仁故に、此の如く

あたまたからかむ。如何より已下は、文長老の氣概を揚ぐるなり。

⑦ 天錫莊。淨慈の後録に見ゆ。謝賜山上堂あり、忠曰く、一理宗の賜ふ所の田に於て、種收の事を辨ずるが爲に、建つる所の莊舎なり。

⑧ 第一二の句は、徑山の後録にも見ゆ。今莊院に肖像を安置するは、これ不意自然に出づる故に、會と同とは莊院の衆人と會同するなり。第三四の句は、眼の光輝々神氣見るべきをいふ。

⑨ 五六の句は、兩朝は理宗、度宗、徽廟とは紹興九年、諸軍州に詔して報恩光孝寺を建て、徽宗の香火に奉ずるなり。

⑩ 七八の句は、良田を下賜すること、上にあり。これ天錫莊なり、田の平均なるを良となす。

此の肖像は永く莊院に安在する故なり、又聖賢の學徒を視す。

⑪ 施水庵。即ち接待堂なり、卷號には非ず、已に普化堂と稱す。往來の人を接待して、茶湯を施すの處、是の處師の肖像を設く、此の菴は蓋し徑山の麓にあるならん。

⑫ 第一二の句は、平等大慈の故に、圓鑰なかるべし、接待堂に託して、應機の普きを述ぶ。三の句は名を打す、璞は「あらたま」なり、已に磨するを玉といふ、かうしてゐる内盡く來機を辨ず、その智恵利鈍當下に觀るべし。四の句は世間の璞玉は分ち易く、出世の梵儀は根がたし、凡か聖か、梵儀は自らの肖像をいふ、この眞の虛堂は。五の句は、凌霄は徑山じや、師の住山のとき、此の贊を作る。六の句、今は

普化堂の開山第一祖じや。

① 紹明。南浦紹明大應國師、宋にあつて咸淳元年夏六月、淨慈の知客寮において請ふところ、虛堂和尚年八十。この像京都大徳寺に在り。

② 第一二の句は名を打す。紹繼する所の法脈は、既に明白であり、一言半句も、みな臨濟の宗旨を失はざれと。

③ 第三四の句は、尋常弄する所、揚岐の金剛圖、栗棘蓬のみなり、これが垂手爲人じや。一二の句は自得。三四の句は化他都て贊辭異なりぬ。

④ 五六の句は、此の如き虛堂なれば、この支那はおろか、世界にも知音は少しじやが、乘流とは畫像にせられて、紹明につれられて、日本に行化するぞと。

⑤ 磻溪。溪の名、鳳翔の魏縣に在り所居の禪子等、請ふのみ、故に縁を取らず。

⑥ 第一二の句は、めつたに氣の短い。

老僧じや、觸犯すべからず。三四の句は畫像の故に、大人の相ありじや。五六七八句は恁麼不恁麼、是句非句とも刻る。しつかとかむなり、じやうばり老僧じや。

① 光禪者。法光藏主なり、偶頤に見ゆ、又續輯の編者なり號は晦叟。

② 一二の句は、阿闍提の人當に是の如くなるべし、學者初めて見るときは、欣ひ、後にはあきはてる。三四の句は名を打す、始終交をむすぶ底のものなし、これは喩を設けて上の意を釋す、蓋し不知音底の故に、初終變異す。五六の句はさりながら自然に信得及せば、久々にして靈能あり、もと明月夜光の故に。

③ 玉几。育王山なり、夢影は幻夢の影像、散席は退院のことなり、十二年は師が育王を退く、寶祐六年より咸淳五年に至りて、師年八十。

④ 第一二の句は、鬼神に於ても宜し。

く敬して遠ざくべし、明友に於ては宜しく親んで疎なるべし、敬に過ぎ親に過るときは、必ず漏れて不義を知らず、今之を言ふて頂相を奉ずるの道を示す。

① 三四の句は、靈茶膳膳は、學者の明鑑を云ふ、直下に輕重を定むをいふ、學者を勘驗するなり。

② 五六の句は、徑山と萬象の外に高しと虛堂自ら云ふ、象峰の小なるもの、海嶠は日の出づる處、蟾影は月をいふ、眞箇の頂相を揭示す。

③ 七八の句は、子は白頭、即ち個位、父は黒頭、則ち無功用、これは贊を乞ふをいふ、吾れ渠をとば父は全く顧みざるの意なり。

④ 老郎。行者(あんぢや)なり。或は衆老官員をいふかと舊注にあれども思は力者の上首なりと、西寮はその居處、又像を設けて炷拜に備ふといふ、清規開堂の章に出づといふ。

⑤ 第一二の句は、意氣面目の嚴肅をいふ。

① 溢る、勉めて之を書す。

② 敬して遠ざかり、親しんで疎なり。明かに靈腑を鑑みて、善く錮鉢を定む。凌霄高うして衆峰拱し、海嶠聳えて蟾影孤なり。子歸つて父に就く、吾れ渠を識らず。

徑山の西寮の衆 老郎請ふ。

③ 霜嚴しうして氣烈しく、山空しうして月明かなり。有得を涵養して、不平を剗削す。拈起するときは則ち佛祖も不識、放下する也艸木榮を爭ふ。凌霄に推到すれば八十四、誰か知らん名九重城に重からんとは。

④ 妙源 嘗て師の 十會の語を拜觀す、南屏雙徑の如きんば、提唱甚だ多し、惜しいかな未だ盡く梓に鏝めず、曩し曾て師に凌霄に侍す。因つて 此の請あれども允さず、今叢林の衲子、咸く流傳せんことを欲す。謹んで録して後集を成す。倘し覽んもの、言外に師を知らば、則ち 我が師の語、何ぞ剩ならん焉。咸淳五年、歲 巳己に在り、佛成道の日、新差住持、福州鼓山嗣法の 小師妙源拜

述ぶ、拈れ野に一輪さへわかつてもものすごい。

① 三四の句は、俊良を登崇し凶邪を拔去す、これ竹篋下の抑揚、有得は四海の英雄、不平とは師も随分難多きことありしゆえこのごろは平事ゆえ。

② 五六の句は、一塵を拈起すれば佛祖も把住底なり。放下するときは草木爭榮とは、ことごとく那一箇に歸す。

③ 七八の句は、師の法藏を述ぶ、八十四とあれども八十一の間違なりといふ、名藍九大利に歴住して、未後に徑山に住すゆえに、名は九重の御奥にまできこえたり。

④ 妙源。號は昏之、興聖錄の編者なり。

⑤ 十會。興聖、報恩、顯孝、瑞岩、延福、寶林、育王、相岩、淨慈、徑山、共に十會。

⑥ 此請。この録を開板せんこと

書す。

小師、楚萃清塞、謹んで衣資を抽んで、工に命じて刊行す。

を請へども、師堅くゆるさず。尤はうけがはぬ。我師之語。此の言句の外に向つて相見したならば、文字はかくれる。成淳五年。この十月七日に、虚堂は示寂せらるるに依り、臘

四五二

八に到つて編録す。
① 已巳。つちのとのみ。
② 新差。差はえらぶ、新命のことし。
③ 小師。前のは虚堂の弟子妙源後のは妙源の弟子なり。

後録 終

虚堂和尚 新添

勅差住持

洛陽萬壽法孫比丘

宗卓集す

① 禪會の圖に讚す。

② 黄檗佛を禮して

③ 宣宗を掌す。

④ 七赤の軀、額に圓珠あり、問著すれば便ち掌す、膽大心危、是れ大中天子にあらずんば、幾乎馬を喚んで驢と作さん。大家水底葫蘆を按す。

⑤ 趙王趙州を訪ふ。州禪牀を下らす。

⑥ 堅にして剛ならず、柔にして弱ならず、七百甲子の老翁、偏に此の一著を用ひんことを要す。列士の王來れども牀を下らす、高風千古標格を爲す。

① 新添。これは當に「虚堂和尚語錄新添」といふべし。

② 勅差住持。天子の勅命あつて住持するを勅差といふ、支那では淨慈、徑山等はそれなり。洛陽萬壽。京都五山の一今は東福寺の中に移す。

③ 宗卓。絶居宗卓は南浦に嗣ぐ、費後の萬壽に住し、久しく開法す、後に洛の萬壽淨智に遷住す、後宇多帝詔して南禪を主らしむ、建武元年六月二十七日寂す、廣智禪師と勅諡す。嗣法二人あり。

④ 禪會圖。編纂聚會の圖都べて十二幅。珠六く、「初の十首は在家にして、禪祖に參會するもの、後の二首は廬居士而已、妙源の爲に讚す。

⑤ 宣宗。名は純、李唐第十七代の主。
⑥ 第一句は、尺は赤に作る第二句は額間隆起して珠の如し、碧岩十一則にも出づ。三の句佛でも達磨でも便ち掌す、碧岩の二にも載す。四の句は抑下の托上、五の句は大中は即ち宣宗の曆號。六の句は實主共に抑下、愈行沙門と賜ふた、

③ 肅宗、忠國師に十身調御を問ふ。

萬乗の垂衣問端を立す、國師の答處太だ瞞預誰か知る十月清霜の重きことを、一陣風來つて一陣寒じ。

④ 李翺、藥山に參す。

黑豆數へて窮りなし、青松蓋ひ盡さず。癩然たる老比丘、此れに即して吾れ隠すことなし、更に雲水を提げて曲げて周遮す。添へ得たり傍人眼裏の花。

⑤ 韓愈、大顛に見ゆ。

毘拍板無孔笛、省要一言を乞ふ、虚空霹靂を轟す、機に臨んで身を轉ずることを解せず。又却つて他の聲色に隨ふ、聲色に非ず、洞庭湖外千峯碧なり。

⑥ 莊宗、興化に宣して問答す。

③ 肅宗。名は亨、李唐第八代の主、この話は碧岩の九十九則に見えたり、本叢書第七卷四五一頁に出づ。

④ 第一の句。垂衣は帝者を云ふ前に見ゆ。二の句は瞞預は大きなつら、ぬらりとした、うつかりとするをいふ。三の句の答處は身の毛のよだつ、四の句は、滴水滴凍じや、此れは國師の既に答へて云ふ、檀越是虛頂上を踏んで行け、又自己清淨法身と認むるなかれと、これ重々徹骨徹髓、實に霜風の陣々寒きが如しじや。

⑤ 李翺。この事は前の佛祖贊に見ゆ。

⑥ 第一の句は、黑豆は經の文字なり、藥山の常に看經するをいふ。二の句は、李が千株松下、兩面の經といふに依る、乾坤も蓋ひ盡さぬ大人の境界なる。

後には斷際禪師と賜ふた。七の句は賓主共に水中に葫蘆を按ずるがごとし、法に於て把不定なり、底は中といふ如し。趙王。鎮の帥、王鎔なり、諸子を携へて院に入る、師坐して問ふて曰く、「大王會すや」王曰く、「不會、州曰く、「小より持齋、身已に老ゆ、人を見て禪牀を下るに力なし」王尤も禮重す。

① 第一の句は、法王の體裁、當に是の如しと、これは趙州の機鋒。二の句は百二十歳を七百甲子といふ、州の歳をいふ。三の句は本分界中、高下あることなし、是れ此の一着、この祖宗門下は只だ本分の事を以て人を接するが故に云ふ、偏に用ひんと要すと。四の句は列土は列國なり。五の句は千古高尙の風格、のり手本となる。

⑦ 君臣慶會全機を豁にす、百億の山河貢を盡して歸す。太平無價の寶を拈起す、乾坤何れの處か光輝ならざらん。

⑧ 順宗、鵝湖の大義禪師に問ふ。

當機の一句天關を闢く、海闊く山遙なり豈に等閑ならんや。笑ふに堪へたり冬瓜の長うして儻侗たるか、翻つて瓠子と成つて曲つて彎彎たることを。

⑨ 文宗、終南山に蛤蜊の瑞相を問ふ。

擲すれども開けず、撲すれども破れず、人は言ふ大士の應身と。我れ也た他の眞箇を疑ふ、終南山相應和す、喜龍顔を動して百億俱に賀す。誰か知らん別に彌天の過あることを。

⑩ 龐居士、馬大師に問ふ。

頭を藏し影を露して來由を問ふ、却つて西江

三の句は、身形を鍊り得て、鶴の形に似たりといふを述ぶ、四の句は、此の畫像の本然の相に即して、眞理現成別に甚の提誨をか願ひんとなり、吾はとは藥山を云ふ。五の句は雲は青天に在り、水は餅に在りといふを述ぶ、これ繞路委曲に提示する故なり、李の悟得を抑す、六の句は李が提誨を聽いて忻愜作禮する故に、傍人は李を指す、眼花を添ふるのみ眞の旨を會せずとなり。

⑧ 韓愈。名は愈、字は退之、文公と諡す、潮州を鎮するとき大顛に參す、大顛は名寶通、石頭遙に嗣ぐ、この事は諸書に出づ。⑨ 龐相板無。第一の句は、みな音のなき鳴物、これは韓愈大顛共に不啻なるを抑す。第二三句は、愈が云ひし軍州事多

し、省要の處をふ師一言、師良久すの意なり。四の句は、韓措くことなしの處。五の句は、三平侍者禪床を敲き、乃至注脚を下すの處、入處を得たりと。七の句聲色ではいかん、そんならどうじやと、激して眞理を示さんことを要すと。八の句はこれ省要の處じや、今現成天眞の境界を示す、洞庭湖は湖廣の岳州にあり、これ南國にして、潮州も更に又南なり。

⑨ 莊宗。名は存勗、五代唐の第一主。⑩ 興化。存獎禪師、臨濟に嗣ぐこの話は類聚帝王部に出づ。⑪ 第一の句は、莊宗と興化と各々其の道を以て慶會し、胸中互に打ちまけていふ。二句のは此の如き故に、萬邦みな其の物を貢して歸降するとなり。三句のは中原を收めて一寶を

得たり、人の價を酬ゆるなし云云、帝兩手を以て幞頭脚を引いて、之に示すの處を云ふ。四の句は盡乾坤の中みな君主の至寶なりと。順宗。名は誦、李唐第十一代の主なり、然も鸞湖に問ふものは、順宗の子の靈宗なり、こは傳燈に出づ。

鸞湖。大義、馬祖に嗣ぐ。

第一二の句は、鸞湖が當機觀面、陛下所問を離れずとの一句を以てす、天關を運し、地軸を轉ず、朗然たる端の直に海闊く、山遙なるに似たり、豈に容易に等閑に當てんやと。三四の句は眞宗に契ふの處を抑下す、備何は直にして長き貌、彎彎は持滿して弓の曲る貌、一味平等の眞際を證するに喩ふ。

之を問ふ、師曰く、「夫れ物虛應なし、此れ蓋し陛下の信心を廣むのみ云云、」この事傳燈四、嵩山普寂の法嗣の惟政禪師の傳に詳に載す。

第一の句は、萬法不侶の間端、實に此の如し、乾坤只だ一人とさとりつめた、實位に下つて問へども本來人をまつかうにさしかざしてきた。二の句は、言を以て答ふるを訓といふ、此には馬祖の劈腹腕心の處あれども、知りてがない、汝が一口に西江水を吸盡するを持つての處。三の句は、所謂心空の端的じや、居士の頓領衣要を云ふ、全體托上なり。四の句は、王宮の正位、御街は禁中の衝にあるを知らなんだ、自らおもへり、及第して歸ると、今依前としてなほ選佛場に在るなり、その實は吾れ我を忘るの境界なり。

丹霞。天然禪師、五燈會元の丹霞の傳に出づ。

第二の句は、冤家必ず魁頭あり、冤を報ゆるは領らく其の頭を見るべし、債物も必ず財主あり、此の兩句は、丹霞の居士を訪ふに喩ふ。三四の句は、丹霞が居士を訪

を把つて力を盡して誦ゆ。首を回せば眼空して天地窄し、知らず身の御街に在つて遊ぶことを。

丹霞、靈照女に見ゆ。

冤に頭あり債に主あり、天然龐翁を訪はんと欲して、恰好此の女に撞著す。家私を揣り盡す瓜は甜く蒂は苦し、茲れに因つて上下和同せず牛孺郎忙として赤土を塗る。

龐居士、大家團圓として共に無生の話を説く。

窮厮煎じ、餓厮吵す、父子途を同じうせず。大家相脱卵す、萬頃の湘江洗へども清からず。無生の曲調何れの時か了せん。

龐居士、闍家都べて去る。

神出でて鬼没す、響を接し虚を承く。這の火絡、邪法扶け難し。互に魚目を將つて明珠と

ふて、ちやうど此の靈照女に川で會つた。五の句は、家私は家財なり、靈照女が菜籃を放下し、又かごを提ぐ、幾許の氣力を費せばなり。六の句は各々脱精。七の句は父子機々まぢ／＼ゆえ。七の句は、彌は餘に作る、母なり、郎忙はあはたしく、無分曉を赤土を塗るといふ。

龐居士大家。相聚つて圓坐すなり、傳燈に居士の傳に偈あり、曰く、「有男不レ婚、有女不レ嫁、大家團圓頭、共説無生話。」

第一二の句は、炒は當に炒に作るべし、煎炒はみな急迫の謂なり、この兩句は、單に大家無生の話柄を表す。三四の句は、父子差別すと雖も、大家共に脱出を得となり、脱卵はまるはだか、差錯の義なり、卵は出の義なり、月出卵など

の類か、戸を開く時なればなり、五の句は、居士は衡陽の人、龐彼に在り、湘江はひろくとしてゐるが。六の句は、本來無生の眞法を讚嘆す、萬頃の湘江をさつぱりと行水させたいとなり。

龐居士闍。一家の父子、都べて脱出すればなり居士より、一七日さきに靈照女は坐亡す居士は一七日を延べて化す。

作す、笑倒す西天の碧眼胡。

① 紹定四年、清の明日、嘉禾の興聖に住する智愚、妙源侍者の爲に敬つて賛す。

② 棘林和尚の遺書至る。

③ 因つて記す七峰より玉几に來りしことを、去年花月に雲拗を下る。未だ一歳を周らず我に背盟す、春燈を別り盡して眼交らず。

④ 鍼生大阮

⑤ 道を鍼鋒の上に假つて、雲水の中に行藏す。

⑥ 且つ心法の妙なるのみに非ず、自ら是れ手頭通す。前輩多く偈を遺る、靈襟衆工を出す。明朝何れの處にか去らん、黄葉度谿の風。

⑦ 琳禪人、豫章に歸る。

⑧ 慎んで窺管を將つて靈知を鑑みよ、用亡羊に在れば愧斯に在り。謂ふこと莫れ西山好消息と

須らく知るべし江海に名縊あることを。

⑨ 雲山の小景

⑩ 渺渺晴煙薄く、蒼蒼として古樹昏し、天涯殊に未だ足らず、此れに對して暗に魂を消す。

⑪ 孤山

⑫ 黯黯青青たり一望の中、迥然として衆峯と同じからず、白雲散じ盡く江天の曉、想ひ見る人間路の通するなきことを。

⑬ 右の五、或は前録に載せたり今の本に見えず、故に此に收在す。

⑭ 乘彝李君が五偈を和す。

⑮ 深夜何人立少林、見成公案不須尋

堆山 積嶽 難消遺、相對頑然鐵作心

呈瑞 喧傳是有年、眼前分曉被人

謾、自家冷暖知來處、老骨從前不怕寒

の名。

① 第一二の句は、鍼術を以て身を法中に委ねて、他の貴介の門を何はず。三四の句は、心法の妙を忘るといふが如し、心の妙なるのみに非ず、自ら手頭通ずるなり、手のさきほどの意なり。行藏は境界、雲水は江湖。五六の句は、前輩の鍼生。忠曰く、此の一聯は二句を以て一意を成す、前輩は虛堂諸方の人を尊稱す、靈襟と衆の字は、皆諸方の偈を遺るの人に係る、諸草宿みな偈を遺る、みな胸中種々の作意巧工を出す。七八の句は、此の老行履の輕きを表す。さむそらになるに、どこへゆくや是れ什麼ぞ。

② 琳禪人。不詳、江西の南昌府は、即ち豫章郡なり。

③ 第一の句は、窺管は回光返照の一路に比す、東方朔が傳の

宗から見れば、魚目を將つて明珠とするやうなものじや、連綿の全身説去して、獨り自ら歸ることを笑倒するなり。

④ 紹定四年。辛卯、理宗の朝、清明の日は三月節なり。

⑤ 住壽采興聖。師正に四十七歳、以上の十二贊を作る、妙源は晋芝と號す。

⑥ 棘林。曹洞宗の人、育王録に見ゆ。

⑦ 第一の句は、やれ／＼思ひ出した、七峰は九峰の誤なり、伏錫山の墳墓なり。玉几は育王を云ふ、同録に見ゆ。二の句は花月は春月なり、雲拗は山をいふ、回と同じ、去年春月、伏錫山を下つて育王に來るなり三の句は、背盟は我に別るを云ふ、不詳なり。四の句は眼不交とは通霄渡られぬを云ふ。交は合なり、愈傷してねられぬなり。

⑧ 鍼生。鍼術の書生、大阮はそ

字を借りたるも、意は大に異なり、彼は小卑に比す、今は專要を取る、靈知は妙心なり、只だ只だわき目もふらず、所見の約かなるの義を取る。二の句は亡羊は多岐に涉るをそしる、列子の説符に、楊子の隣人、羊を亡ふ云云より出づ、言ふ意は心に約して道體を見る、若し用處多岐に涉らば終に功を成さず、その慚愧、彼に在らずなり、只だ一と筋にわき目を見るな、萬事をなげ打ち、大道に目をかけよとなり三の句は、西山は南昌府なり、その山上に勝槩多し、石頭津や梅嶺や、故に好消息といふ、故郷に久しく留まるとなり。四の句は、四海五湖に、名譽の師家あることを、それを訪へと、滯郷の心を戒むなり。

⑨ 雲山小景。後の孤山と二幅一對の畫のみ、雲の山の景象を

小分に畫き成すをいふ、故に小景と。

⑩ 第一二の句は、雲山深鬱の象を述ぶ。三四の句は小景の意を述ぶ、言ふ意は畫軸の故に天涯殊に足らずと雖も、此の渺々蒼々中に對して、遙かに遠くの思を作して、暗に驚くとなり、かぎりもない風景天地も、せまいくらいだと。

⑪ 孤山。前の圖と双幅乎、唯一峰を畫いて連山を畫かず、突兀たり。

⑫ 第一二の句は、照々は深黒なり、こなたの山をいふ、迥然は孤を頌す、形容することば三四の句は、三の語は山を頌す、かなたの山なり、四の語は孤を頌す、これ畫圖の故なり、別に天地あり、人間世にあらずで、どうも行かれぬ、仙境の如しとなり。

⑬ 乘彝。官の名、齊名か、未詳

四五九

千鈞之重一毫輕、好句聊將尉客情、
縱擬怪松爲玉樹、月高依舊可憐生。

曉聽君臣慶賀時、六街如畫不曾迷、
普賢境界應垂問、手詔來時見紫泥。

爐邊呵凍得能多、端石無辜日夜磨、
却把悼詞爲雪咏、詩魔難敵勝修羅。

寵して五偈を和せしむ、調高うして續ぎ
難し、未だ是れを許ぐることを免れず。

伏して巧ふ笑搯、智愚 再拜。

禪客の智仁に贈る。

法戰場中樹勝旗、話頭何似問頭危、古
人滅寇添兵處、切忌交鋒踐過伊。

問話の行者智仁、香を炷いて語を請ふ、
此を以て之に贈る。

景定癸亥至節、虛堂老僧、雪竇の西庵に
書す。

日本の南浦知客を送る。

敲磻門庭細掃磨、路頭盡處再經過
明明說與虛堂叟、東海兒孫日轉多。

明知客、發明してより後、日本に歸らん
ことを告げんと欲す、尋いで 照知客

通首座 源長老、頭を聚めて 龍
峯會裏の家私を説く。紙を袖にして法語

を求む、老僧今年八十三、思索するに力
なし、一偈を作つて以て行色に 資

す、萬里の水程、道を以て珍衛せよ。

咸淳 丁卯の秋、大唐の徑山に住する
智愚 不動軒に書す。

鳴鐘の佛事

國譯虛堂和尚語錄 卷十

なり、詩經の丞民に「民之秉
畀、好是懿德」と、注に「秉
は執る、彝は常、懿は美なり」と
と李君とば名位なし、故に其
の姓を稱す云云、今この五偈
を見るに、みな臘雪を賦す、
李君の偈も亦此の如き乎。

一の偈。一二の句、二祖立雪
の事を用ふ言ふ意は雪の時は
一理齊平の公案現成す、何ぞ
少林に立つて、苦ろに尋覓す
ることを須ひんとなり。珠云
く、「今もあるかやい、あゝ
ふつたる雪かなじや、此の章
は二祖を以て李君に擬して、
直示するなり、見成と、さはさ
りながら、此の外には」と。

三四の句は、山にも嶽にも回
避することなし、これは雪か
みぞれか、頑然は無知無動の
貌、言ふは此の雪に相對して
頑然として坐して、無知無動
なり、所謂生鐵鑄成す底の心

詩を恵む、恩情の重きにくら
ぶれば、一毫よりも輕いと。
二の句は、慰通じて尉に作る
言ふ意は李君が好句をきいて
客情を慰すと、蓋し虚堂が青
玉を退くとき、客遊するとき
手。三四の句は、怪松は奇異
の大木を謂ふ、憐は愛なり、生
は語の辭なり、言ふ意は此の
雪たとひ怪松を擬して、玉樹
と爲し、月夜高影清致、依前
として最も愛しつべし、怪松
は虚堂の如きといふならん。

四の偈。一の句は曉は明なり。
臘雪を豊年の瑞となす、故に
君臣慶賀す。二の句は、六街
は都下を指す、如畫とば此の
雪に依つてなり、曾迷はずと
はとんとまよはぬなり。三四
の句は、普賢の乗るところ、
白象銀世界、垂問は天子の間、
應は群臣答ふるなり、詔を民
間に下して、豊年瑞を問ふと

肝なり、盡法界自漫漫地じ
や。

二の偈。一の句は、臘雪を瑞
と爲す、言ふ意は百姓臘雪を
見て、來年豊有の瑞を呈して
喧く傳ふるなり、老傳に「五
穀皆熟、爲有年」とあり。二
の句は、其の任運天運の理、
目前分明、却つて喧しく傳へ
て、人に讓ぜらる、己に迷ふ
て物を返ふなりと、豊年のな
んど、人の口に付いてまはり
大に讓ぜらる。或抄に、「一
二の句は諸方をいふ、三四は
虚堂底」三四の句は、他人の
欺誑を受けず、己に返照して
見れば、天時の嚴寒をひ怕れ
ず、老僧は虚堂自らを云ふ、
寒灰枯木じやほどに。

三の偈。は一の句の千鈞の重
は、李君が詩名を稱す、一毫
輕は自らの才調を謙す、世界
の中の千鈞の重きも、李君が

なり。

五の偈。一二の句は、李君に
かけていふ、爐邊に凍筆を嘘
呵して、得は句を得るなり、
端石は硯なり、端溪に二三種
ありといふ名品。三四の句は
悼は八十九を嚙といひ、七
十を悼といふと、禮記の曲禮
にあり、「悼詞は謙下の謂と
舊記にあるも誤なり、浪悼の
詩を作るべきに、却つて雪の
咏をなすなりと忠はいへり。
四の句は、特に和偈を造るの
意を述ぶるなり、虚堂は詩が
すき故、とかく詩魔となりて、
詩興を催すとなり。

龍。龍過なり、諺は李氏に告
ぐなり。龍は覽で、觀なり。
再拜。舊本來に作るは非な
り。

禪客。宋の時、例して禪客を
置く。

一二の句。中々人にまけぬ處

四六一

金を烹り玉を鍊り、聖を煖ひ凡を鎔す、鉛錘を假らず、便ち大器を成す。霜清く月皎し、圓通三昧の門を證す。雲淡く天恆し、勞生昏迷の夢を破る。壽空有に同じて永く化城を鎮す、最初の一推如何が話會せん。鐘を聲すこと一下して云く、「劫石は銷する日ありとも、洪音は盡くる時なけん。」

化城鳴鐘、咸淳戊辰冬十月日、徑山に住する虛堂智愚書す。

蓬萊の宣長老に答ふる書。

智愚、蓬萊堂頭、無示禪師に啓復す、二月初十に僕至る、惠む所の書を收む、且つ住持の縁法を審にす。勝を増し尉を爲す、所言心腹宣勞の人に乏しと、時節然らしむ、當に古風を體むべし。地藏道く、「諸方禪を説くこと

浩浩たり、争か我が田を種ゑて飯に博ふるに如かん」と。者般の説話、大いに田地あり。風穴は破屋敷間を見て、單丁なるもの七年、瀉山は、椽斗子を喫すること九載、此れ皆哲人の事業にして、後世を光明すること此の如し、但だ恐らくは久遠の心なからんことを、今は則ち利道交も行はる、擧げて目ふべからず、況んや蓬萊は海上の名山にして、前輩行道の地なり、自ら常に歩を退いて謙愿して、叢林を以て念と爲し、衆人を以て心と爲すべし。自然に般若の縁勝起して、香風四に吹かん、何ぞ宣勞のものなきことを思へん。勉め努めよや。是に紫を恵に承けんことを請ふ茹ぶること兩月、甚だ佳想ならず。交運此の如し、靈隱已に脱す、相伴を選ぶ而已。光老

の禪客じや、話頭を擧げて抄開する餘餘なれども、即今禪客の抄問は一ばい、又々危險なり、三の句は、孫臏の謀、上に見ゆ。放牧與奪の廣、兵家の術を示して強を用ふるところ、添兵は大軍を張りてみせる、公案は盡く無明の兵法じや。四の句は、寶主機鋒を交ふるの間に於て、宜しく如上の謀略を施すべしと、切忌は戒なり、敬なり、躑躅は「すきまはないほどに、伊は根本の大事じや、古人の故と收との處をさす。

- ① 景定癸亥。四年なり、虛堂年七十九、至師は冬至。
- ② 南浦知客。名は紹明(せうみん)一、虛堂に嗣ぐ、咸淳三年丁卯秋歸朝す、日本の龜山天皇文永四年なり、時に年三十三、虛堂は八十三齡なり、按ずるに日本の後深草天皇正元元年

己未入宋、年二十五、景定五年甲子、三十歳にして初めて虛堂に參ず、入宋より九年にして、日本に歸る、花園天皇延慶元年十二月二十九日示寂、世壽七十四、勅して圓通大師國師と諡す。

- ① 第一の句は、礎は石の相築くこゆ、「かつちり」なり、門庭は諸方の知識をいふ、敲磧は參問すること、これは入宋底をいふ、委細に描畫琢磨するなり。第二の句は、路頭處は海をいふ、再は來時去時をいふ、言語道斷の處に於て、再三懇懇なることを表す、命根截斷の上に細に穿鑿するなり。第三の句は、明々は南浦の名を打す、まうく南浦きづかひはないぞよと第四の句は、日本國裏、法孫は日に更に多くならんと、うれしく思ふて行かしやれと、此の處、豫言

をせられた、今の日本臨濟はみな師の子孫ばかりじや。② 照知客。未詳なり。③ 通首座。偏頰の部にある、禪客通藏主か。④ 源長老。寶葉妙源禪師。⑤ 龍峯智禪。徑山屋裡の禪を商量す。⑥ 費に作るべし、行を贈るを云ふ。⑦ 以道珍衛。萬里の海航、保重衛護せよと。⑧ 丁卯。咸淳三年なり。⑨ 不動軒。徑山の方丈なり。⑩ 鳴鐘佛事。化城寺の newly 鐘を購て、師を請じて最初の一推を下さしむるなり。⑪ 第一二の句は、尋常の鋼鐵に非ず、上は世間の法器にたとへ、下は出世の法器に比す。作家の爐竈に入るべしと。三四の句は、尋常の巧治に非ずと。これ鐘に託して佛事を作す、

この虛堂門下、眞箇の法鐘を鑄出す。五の句は已下鐘の功德を云ふ、霜清くと、夜半の鐘をついてはと、これは明をいふ耳根圓通三昧をさとする。六の句は夜あけの景色、これは暗をいふ、塵勞衆生の迷の夢を破る七の句は、空は壞劫、空劫、有は成劫住劫、言ふ意は其れ永なり。八の句は、化城は寺の名なり。⑫ 著語。劫石有三銷日、輕衣石を拂ひて、洪音鐘より出づる大音はじや、天地虛空はなくなつても、此の鐘聲は畢竟つくとときなしと、是一那箇の消息を云ふ。⑬ 蓬萊宣長老。師の門人前に見ゆ。⑭ 無示。宣公の號なり、書體他を尊重す、見るべし。⑮ 增勝爲尉。優勝を増し、慰安をなす。

① 宣勞之人。輔佐の人をいふ、吾が事を辨ずること、吾が心腹の如き人、宣は布なり、苦勞を宣布するなり。

② 時節使然。時節未だ到らず、故に此の如し、古人の風度を體せよ(みよ)の心なり、切急なるべからず、初住はそんなものじやと。

③ 種田博飯。種山後録に見ゆ。

④ 大有田地。基本あるをいふ、據あるなり。

⑤ 椽斗子。大徳の瀧山でも、施王も椽那もない、とちのみやくりのみを食ひ充て、斗子は「とちのみ」なり。

⑥ 哲人。古の有徳の人すら。

⑦ 但恐無久遠。この虚堂も末永い月日が大事じや、恐らくは其の時を待たざることを。

⑧ 今則利道。結利法道、檀縁もかなふて、利養の道世に行はるるを云ふ。

⑨ 不可舉目也。日は名目なり、之を見るに忍びずじや、その勝を嘆ずるの謂なり。

⑩ 蓮葉。浙の明州は澤園故に、前輩が自利利他の行道の地なり。

⑪ 退歩謹慙。慙も亦謹なり、名利をやめて、只だ自己を守る、叢林大衆の爲になるやうに扶堅の念をなし、衆人の應接は親疎なくすべしと。

⑫ 般若之縁勝起。内は般若の智の勝縁、外へあらはれば道香徳風四方にひろがりて、學者したひ來らんと、勉勵と、此の一節は、來書の旨趣を責めて、古を引いて、以て任持の要を示し、上の宣勞の人なき云々の語を結ぶ。

⑬ 承惠紫茹。この十四字、忠も難解なりと、或は、惠紫は僧名ならん奏請するところの護法興後の事、茹は相牽引して、兩月を經るなりと、佳想ならずは不快なり、交運とは君臣交好、其の運遇せざること此の如し、則ち退休すべしと。

舊注や龍溪の注は、不可なりとす是語の二字は、逸堂云く、「上の勉勵の二字の下へ付くべし、上のことを結ぶ語なり」と。

⑭ 靈隱已脫。其の主なし、虚席なり相伴を選ぶとは、法の爲に大衆と道伴を求むるのみ。

⑮ 光老。東谷妙光、明極祥に嗣ぐ、事は行狀に見ゆ、その時虚堂も單を移して、松源の塔所、靈隱に歸りてをるであらうと。

⑯ 耳根清淨。提唱の語句を聞かんことを要す、次の飲茶道話は、退閑無事にして、目を過すを樂むをいふ。

⑰ 寄來提唱。已下は法語を點削するを叙ぶ、弟子が開堂演法には、その提唱の法語を師に運片を乞ふなり、則師とは未詳なり、方郎は士の名。

⑱ 搭住幾時。滯寮の意なり、片便りゆゑ、早速とよかねと云ふほどの意か。

恐らくは三月の初めに進院せん。單を移して松源の塔所に歸り去らん。庶はくは耳根清淨ならんことを。又江湖の兄弟と相伴なつて茶を飲して道話することを得ば足りなん矣。寄せ來る提唱已に一點校す則師に付して封じ去る、方郎が母の信に縁れり。搭住すること幾時ぞ、凡そ後辭を措き言を遣つて、子細に古今を錐割し、大意を詳盡して、及を下す處較嚴にせよ。諸方の泥中に土を洗ふに似たること莫れ、春暄かなり、善く宜しく調攝すべし、至祝不盡。二月二十八日智愚啓復す。

① 權淨侍收に示す

② 出家の人の務は、潔清淨にして三業を勤策するに在り、塵俗と汚居すべからず。老夫

② 凡後。已下は禪語を作る法則を叙ぶ、措辭遺言は法語を造るなり。凡後は「これよりのち」なり。

③ 子細錐割。古今の作者の痛處を錐割するなり、「はりの立つるが如く、きびしく」なり詳盡大意は容易にすべからずとなり。

④ 下及處較嚴。學者の爲に、一植を下す處、直に須らく他の性命を截斷すべし、虚りに放過すべからず、法語を拈弄するには須らく嚴密なるべしとなり。

⑤ 泥中洗土。無分曉の義なり、此の一節は、他の提唱を證して、更に將來、衆に臨むの方を示す。

⑥ 調攝。宜しく調和保護して、色身を養生すべしと。

⑦ 二月二十八日。忠曰く「按ずるに東谷の靈隱に住するは、

理宗の寶祐二三年の間に當る師七十歳許りの時か。」

⑧ 權淨。名なり、侍收はなほし侍司の如し。忠曰く、「侍衣なり、住持の衣鉢を收納する役なり。」

⑨ 潔清淨。名を打す。

⑩ 三業。身口意の作業。

⑪ 老夫偶適。師自らいふ、師責對當、安便の意なり、之れとは權淨を指す。

⑫ 低細教育。低聲委細、皆心切の意なり。

⑬ 前所戒。出家の人の務云云。

⑭ 潔已處心。己とは身口の業、心とは意業。

⑮ 學業周身。身口意の三業を回して、戒定慧の三學となす。

⑯ 出家本志。回照發願。

⑰ 局。侍者寮の部屋、これ出院の謂なり。

⑱ 八十五年。掉臂とは程を食ること太だ急にして、威儀を顧

偶之に適へり、低細に教育して、其れをし
て、前に戒むる所を照して、己を潔くし
心を虚にして、學業身に周うして、以て
出家の本志を了せしむ。如し其れ然らずんば、
請ふ此の局を出でよ。

辭世の頌

八十五年、佛祖も不識、臂を掉つて便ち行
く、太虚跡を絶す。

行狀

師諱は智愚、四明象山陳氏の子、虚堂は其の
號なり。家、邑の普明寺に近く、相距るこ
と一里許、山あり、其の祖、壽穴をトせんと
欲す。相者謂く、「此の地高きは則ち子孫を
廢つて富盛ならしめん、伍きは則ち當に異僧を
出すべし。」祖曰く、「願はくは僧を得て、以て

- ① みざるの意なり、太虚絶跡とは須らく參究すべし。
- ② 行狀。狀は陳なり、行業の實を狀陳するなり。
- ③ 四明。寧波府、唐には四明と名づく、郡に四明山あるを以てなり、今浙江省の中、象山は縣の名。
- ④ 普明寺。象山の中であり、陳家を距ると一里許り。
- ⑤ 壽穴。預め墓穴の地をトし。祝して壽穴といふ、壽塔などの例。
- ⑥ 廢。庇廡なり。
- ⑦ 伍。長なり。
- ⑧ 長抱。拊と同じ、手、上よりして下を極む、支那の敬禮。
- ⑨ 德。記憶なり。已上は生緣の異を狀す。
- ⑩ 無經世意。世間的の家事作業を事とせず。
- ⑪ 舌貫鼻端。相法には賞相となす、佛説にも福德の相となす

- ⑫ 不妄の相となす。
- ⑬ 杜工部天河詩。本集に八句あり、此には四句を擧ぐ、當時任三顯晦、秋至最分明、縱被微雲掩、終能永夜清、含星動二關、伴月落邊城。牛女年々轉度何曾風浪生」と。長は常に、轅は最に作るべし。もと天河は賢者の明に喩ふ、微雲は小人の讒に喩ふ、今は蓋し天河は佛性に比し、微雲は妄想に比す、故に警發す。
- ⑭ 辭親出郷。已上は出家并に、遊方の因を狀す。
- ⑮ 雪竇煥。中庵皎、共に未詳なり。
- ⑯ 公務外。叢林の公作務等なり。
- ⑰ 金山掩室和尚。鎮江の金山は龍遊禪寺、掩室善開は松蘿岳に嗣ぐ。
- ⑱ 運菴師祖。「これは行狀の撰者、閑極より云ふときは非たり、師祖といはず、和尚といふべし」と疎の説。運菴は初め鎮江府の普照、次に蘇州の報恩光孝に、後に安吉州の道場山に住す。この眞の天寧は報恩光孝禪寺なり、揚州府の中にあり、道場山は湖州烏程縣、宋に安吉州、又雲川郡となし、川を名とす。
- ⑲ 雲上。安吉州なり、又雲溪ともいふ、雲は音「さふ」、一せう」などなり。
- ⑳ 菴染。運菴親しく菴染せしめ、不釐務侍者、即ち侍者の事務を理せず、士大夫と同じく入室するものなり、菴は菴なり、擇木堂に居るは、朝土止息の處ゆゑ、之も同じことなり。
- ㉑ 古帆未掛。巖頭の公案、この縁は前の告香普説に出づ。
- ㉒ 躁悶。胸中にえかへるなり。
- ㉓ 清淨行者。破戒比丘、不墮二地獄。文殊師利説摩訶般若波

吾が佛を崇ぶの志に副はん」と。祖の葬するに及んで、未だ數年ならざるに、母の鄭氏、嘗て夢むらく、一の老僧、脩うして癩せたるが、長抱して飯を乞ふ、因つて娠む焉。生する夕に、母復た夢むること前の如し。年十二にして、父母、師を携へて、祖の墳を拜せしめて其の事を言ふ、師、憶する所あるがごとし。十六歳に至りて、世を経るの意なし。父母異相の舌、鼻端を貫くあるを見て、其の普明寺の僧師蘊に依つて出家することを聽す。一日、杜工部が天河の詩の、「長時顯晦に任す、秋至つて輒ち分明、縦ひ微雲に掩はるゝも、終に能く永夜清し」といふを聞いて、忽ち警發することあり。親を辭して郷を出づ。首め雪竇の煥和尚、淨慈の中庵皎和尚に依る、公務の外惟だ坐禪す。二老撫愛して、常に之を左右に置く。道よりして、金山に過る、掩室和尚一見して甚だ器重す、通夕與に語つて倦むことなし。是の時、運菴師祖、事を眞の天寧に謝して、邂逅して語話す、其の氣宇凡ならざるを見る。未だ幾なざらざるに道場に赴く、師を携へて、雲上に過る、菴染して不釐務侍者と爲す。凡そ入室、常に古帆未掛の因縁を擧す、下語するこ

とを許さず。之を思ふ、古帆未掛の話、甚の會し難きことかあらん、其の實は只だ是れ一漚未發已前の事なり、何ぞ人をして下語せしめざることを得んやといつて、方丈に造つて見解を通ず。聲未だ絶えざるに、庵云く、「何ぞ狗口を合取して、静地裏に密密に體取し去らざる。」寮に歸つて覺えずして、蹠悶す。忽然として古帆未掛の話、清淨の行者不入涅槃の話を會得す。次の日入室、却つて南泉の斬猫兒如何と問ふ、師云く、「大地も載せ起さず。」庵低頭して微笑す。此れより諸大老の門を徧歴す、石帆衍叔と盟を結んで、江淮湘漢に游んで、祖塔を巡禮す。夏に、荆門の玉泉に坐す。因つて、虞察院が疎山の壽塔の因縁に於て發明することを思ふ、孜孜として參究す。因に廬

羅蜜經に出づ。
① 大地載不起。珠云く、「是れには五とよ、講釋もなるものかと。」玄沙廣語の略に云く、「大地も載せ起さず、虚空包ね盡さず、豈に是れ小事ならんや。」
② 庵低頭微笑。已上は訪道得悟の由を狀す。
③ 石帆衍叔。運菴に嗣ぐ、虛堂の法弟、曇西禪の師。
④ 巡禮祖塔。前に禮祖塔の條あり。
⑤ 坐夏。雨安居をいふ、又坐臘とも云ふ。
⑥ 荆門玉泉。荊州府の玉泉寺。
⑦ 虞察院。末詳。察院は、官名。
⑧ 東林。九江府の廬山にあり、今の江西省にあり。
⑨ 泮然。氷の釋くるなり、又泮とも書く。
⑩ 無二月。未詳なり。
⑪ 祖塔。衡州府雲密峯にあり。

⑫ 脩首座。師此の人の贊を作る佛祖贊に見ゆ。
⑬ 師與商略。忠曰く、「師の下に「尋訪」などの語あるべし。」
⑭ 反覆博約。反覆往來、宣博細約、共に擧ぐ、博は廣め、約は省略、愈に入り細に入るを云ふ。
⑮ 深相契合。已上は悟後長養充足の功を狀す。
⑯ 北禪體。未詳なり。
⑰ 長老不在。虛堂底を勘破して、眞人好消息。好い便宜を得申したと、不在のもの、これ眞人。
⑱ 指露柱。全體作用なり。
⑲ 行李。行脚の道具、檀子、主丈等は、どこにをいたと。
⑳ 門下著不得。北禪の門下にはおき處はあるまいとなり。
㉑ 傾倒不忍舍。舍は置なり、北禪が虛堂の對揚、羣を出づるを聞いて、胸中を傾倒して捨

山に過る、大雪月を彌る、東林の且過堂に在つて夜坐す、無心の中に、大嶺の古佛、光を放つ時節を會得す、此れより凝滯、泮然たり。其の時、無二の月和尙、福嚴に主たり、龍象を奔走せしむ、師往いて之に依る、則ち命じて藏を典らしむ。脩首座といふものあり、飽參碩學なり、南嶽に歸隱して、影山を出でず未だ嘗て容易に諸方を肯可せず。師與に古今を商略す、反覆博約にして、深く相契合す。北禪の禮和尙といふひとあり、機辯峻捷、納子其の門に登ることを得るもの少し。師一日之を訪ふ、聲を勵して曰く、「新到相看。」禮云く、「長老不在。」師云く、「已に眞人の好消息を得たり。」禮出で、行者を喚んで云く、「新到の僧、那裏に在る。」師、露柱を指し

つるに忍びずと、機機投合、兩方共に傾けつくす。
① 淨和尙。忠曰く、「長翁如淨和尙が、如淨錄の淨慈錄に、掩室和尙を謝するの上堂あり、年歴の符合を證すべしと。」
② 所生父母。自己の眞性、曲げて顛倒を受く、前身紅爛は、地獄に墮して、この語は藥山惟嚴傳に出づ。
③ 好事不在。曠を弄すること莫れとなり、ゆる／＼問ふべしとなり。且緩緩は「まあゆる／＼」なり。
④ 笑翁。名は妙堪、無用全に嗣ぐ、全は大恵に嗣ぐ。
⑤ 以虎丘舊藏。忠曰く、「以の字の上に往依之翁の四字あるべしと。」先哲の行務に效はしむ。再戸は福嚴に對していふ、已上は隨風勘辨の勝を狀す。
⑥ 忠獻史術王。史浩が子史彌遠なり、字は同叔、紹定五年卒

す、衛王に追討し、忠獻と證す。
⑦ 鈞軸。相位に居るをいふ、天下の蒼生を化成するなり。
⑧ 存辨趙公。存辨は名、趙は姓なり、顯孝錄の功德主侍讀尙書は、此の公の益官のみ、趙開府も同じ。
⑨ 侍即黃公。四明の主。前に見ゆ。
⑩ 嬰強寇之難。蒙古并に金の兵は、諸州に冠せしの時なり。
⑪ 松源塔下。鷲峯菴。
⑫ 東谷。名は妙光、明極祥に嗣ぐ、宏智三世。
⑬ 立僧。洞門の法式、首座恐不、俯就とは、大方の尊宿ゆゑに。
⑭ 三轉語。續輯の尾に見ゆ。
⑮ 寶祐戊午。丙辰に作るべし、四年四月初七日に、受請、十九入寺、同戊午六月十四日、蘇日に罹りと、育王錄にあり、參

て云く、「和尚問ふ、備何ぞ答へざる。禮云く「甚れの處よりか来る。」師云く、「福嚴。」禮云く、「行李甚れの處にか在る。」師云く、「且過堂に在り。」禮云く、「我れ備に者箇の行李を問はず。師云く、「若し是れ那箇の行李ならば北禪門。下著不得。」傾倒して舍くに忍びず、是れより浙に回つて、淨慈に到つて、淨和尚に見ゆ。淨問うて云く、「備還つて所生の父母、通身紅爛して、荆棘林中に在ることを知る麼。」師云く、「好事忽忙に在らず。」淨後に隨つて一拳を打す、師兩手を展べて云く「且緩緩。」時に笑翁和尚、靈隱に住す、虎丘の舊職を以て、師に命じて再び藏事を尸らしむ、擧げて杭の廣覺に住せしむ、力めて辭す。忠獻史衛王、鈞軸を乗る、嘉禾の天寧別浦、師の名を以て之を聞して興聖に出世せしむ。實に紹定二年なり、後に報恩に遷る、開府。存叅趙公、明の顯孝を以て、力め請じて開山たらしむ。復た瑞巖に遷る、二年にして退を丐ふ、關を啓霞に掩ふて、頌古代別を萃め成す。延福席を虛にす。侍郎黃公、堅請して之に主たらしむ。繼いで婺の寶林に遷る、五年にして強寇の難に嬰つて、松源の塔下に歸る。東谷和尚、冷泉にまた

- ① 照すべし。
- ② 毅然。果敢なり。
- ③ 陳公。陳防なり、育王の請疏を製す、節齊は表微の齋號か。
- ④ 公議。衲子の陳べをふ、佛法の公議。
- ⑤ 吳制相。慶元府太守。
- ⑥ 信議。或解には知事と塔頭の地を論ず、太守、虛堂を遣ふて獄に下さんと欲す、適晦岩物初等の數老、力めて之を救す、朝廷に奏す、師遂に再び回住す、事を謝し退院す。
- ⑦ 怡然自若。面に怒る色なし、拒抗は敵對すれども。
- ⑧ 作偈云く。この脚注は前に見ゆ。
- ⑨ 古愚余。古愚は號。余は氏、郡は明州で虛堂の故里。
- ⑩ 金文。或は積岩か、未考。
- ⑪ 追於晚景。年八十に近し。
- ⑫ 明覺塔下。雪竇の西卷。
- ⑬ 景定甲子。五年、師年八十。

り、立僧に舉せんと欲す、衲子に俯就せざらんことを恐れて、再三禮請す、師之に従ふ室を開いて普説す、三轉語を垂るゝに、澹泊するものあること岡し。寶祐戊午、育王席を虛にす、禪衲毅然として陳べ乞ふ。有司節齋尙書、陳公、其の公議を嘉して、特に與に敷奏す、是の年四月寺の事を領す。三年にして、吳制相、議を信じて、隙を懐いて師を辱しむ、其の徳を損せんと欲す。師、怡然として自若たり、始終拒抗すれども、略變する色なし、聖旨宣諭して釋し放す。偈を作つて謝し奉つて云く、「去時晚露消神暑、歸日秋聲滿夕陽。恩渥重重何以報、望無雲處祝天長。」古愚余尙書典、郷郡、特に金文を以て之を延く、晚景に迫つて、明覺の塔下に退閑して、終焉の計を作す。景定甲子、旨ありて詔して淨慈に住せしむ。衲子奔集す、堂單以て容るゝことなし、半は堂外に居す。宸聰に上徹す、絹百疋、造帳、米伍佰碩、楮券十萬貫を賜ふ。是の年の秋、又田參阡餘畝を賜ふ、即ち今の天錫莊是れなり。十月、帝崩す、師を召して入内して、對靈普説せしむ。兩宮宣して優渥を資ふ。丁卯の秋、徑山に遷る、冬十月、朝廷より

- ① 終焉。入寂臨終の地と定む。
- ② 堂單。僧堂の單位。
- ③ 造帳。單帳なり。
- ④ 帝崩。理宗帝崩す。
- ⑤ 兩宮。太后と度宗と。
- ⑥ 丁卯秋。又年支を誤る、これは咸淳三年なり、師の徑山に遷るは元年乙丑八月二十五日なり。
- ⑦ 絳纒。度牒紙素を用ふなどと書きつけに用ふるよりいふならん。二十道は二十通なり。
- ⑧ 工役中。作務の中にも、行堂は食堂をいふか。
- ⑨ 兩朝。理宗。度宗。
- ⑩ 帑帛。帑は金幣を藏むる所なり。帛なり。
- ⑪ 望雲亭。徑山に素よりありしなり。
- ⑫ 歸藏之地。骸骨を藏する處。
- ⑬ 己上は出世歴遷、用舎行藏の跡を狀す。
- ⑭ 不通方。方は方偈をいふ、方

香を降して使を遣して雪を禱らしむ、師に期應を問ふ。師曰く、「今夕」と。果して期に至りて爽ふことなし、回つて奏す。綾牒貳拾道、銀券等を賜ふて、僧堂浴堂行堂を一新す。區區たる。工役の中、猶は衆を勵して怠ることなし。師 兩朝の恩遇の寵を感じて、賜ふ所の帑帛を將つて、小庵を 望雲亭の東に創して、扁して天澤と曰ふ、就いて塔を築いて 歸藏の地と爲す。師平生、性 方に通せず、時と合ふこと寡し事に臨んで寛假する所なし、言纒に口を脱れば、則ち 釋然間なし、是を以て學者畏れて之を仰ぐ。二十年常に 靈雲の兩處不答を擧して、衲子に微問す、其の意に契ふものあること少し。己巳の十月五日 祖忌の拈香罷んで、忽ち微疾を感ず。二日を越

は事の宜しきをいふ、寛假する所なしで、規矩嚴重なり。①釋然無間。貴賤親疎のへだてもなく、合を出して罰を行ふ。②靈雲兩處。混沌未分の話、五燈會元の四に出づ。③少有契其。己上は其の人となり、及び衆に臨むの實を狀す。④己巳。咸淳五年、日本の龜山天皇文永六年に當る。昭和四年己巳に至りて、六百六十一年を得たり、この年の十月十七日入寂す。⑤夏臘五十三。これは忠曰く、「折つて數ふるに、師三十三歳にして、運庵和尚爲に得度し、蓋し度牒を買ふの易からざるなり」と。⑥嗣法十數人。正眼宗派に載する所は總べて二十人なり、之れ、報恩の晋之妙源、寶福の象先可觀、靈巖の竹密宗喜、妙相字菴、定州の寶業遺源、

四七二
日本建長の南浦紹明、虎丘の開衲法雲、雪竇の孤溪一了、淨慈の靈石如芝、東山の葛盧淨暉、慈源の友堂禪會、南明の秋岩德新、萬年の東州惟俊、翠岩の此軒如是、四明の虛庵實、萬壽の潛溪妙廣、仰山の晦叟法光、明州の無示可宜、平山本立、東洲瑞藏主等。今此の錄の舊解に依れば、更に加ふるもの四人、石門無隱、懷納無補、日本禪興二世巨山源侍者、天寧の雪蓬惠明。この四人は偈頌や法語に出づる人等なり。①壘干塔焉。即ち天澤菴にうづむ。己上は示寂の事を狀す。②新衲差。衲子を製して擇ひ請ずるなり、新命の義なり、忠曰く、「郡帖を以て住持するなり、近きころ遷る故に新といふ。③法雲。閑衲なり。

えて、偈を書して沐浴端坐して逝す。春秋八十五、夏臘五十三、嗣法十數人、語錄二帙、已に世に行はる。門人全身を奉じて 塔に瘞む焉。咸淳十年、十月十一日、新割差住持、慶元府の清涼禪寺嗣法の小師、法雲、謹んで狀す。

①行狀 或は唐刊、系けて後錄の末にあり、今の本に見えず、故に此に付す。

②祖翁在世の語錄二帙、天下に刊り流ふ。宋の咸淳五年、晉之續いで後集を録して、已に三卷と成す。而して、本朝未だ之を刊行せざることは、先師常に言を爲すも、而も未だ果し成さざればなり。人の後たるもの、曷ぞ爲るに勇むことなからん乎。仍つて遺逸を搜つて、新に數紙を後錄の尾りに添へて、梓に 龍翔に鐫む。③正和癸丑、開爐の日、拙孫宗卓敬書す。④沙彌宗哲等財を施ひて開板す。

①行狀。云云は絶庵宗卓の行狀の尾語なり、此に付すとは新添の後を指すなり。②祖翁。宗卓は南浦に嗣ぐ、故にいふ、此に前十會錄の事を述ぶ。③先師。南浦は後錄を刊せんと欲して、未だ之を成す能はず。④爲人之後者。子孫たるものと宗卓自ら當る。⑤仍搜遺逸。己下は新添の事を述ぶ。⑥龍翔。瑞鳳山といふ、南浦を以て開祖となす、京城外太秦村安井の西、これ舊趾なり、柳殿といふ、後宇多天皇の離宮を革めて寺となす、今は荒廢す、近ごろ大徳寺山内に之を再興して專門道場と爲す。⑦施主山口玄洞氏、舊地には後宇多天皇御髮塔のみ存す。⑧正和二年なり、花園天皇の朝。⑨沙彌宗哲。この十字、正保本四七三

にはなし、南浦下の明室宗詰といふあり、筑前の崇福に住ず、この人か、延寶傳燈の二十に出づ。本録國譯に付いて、萬治元年板の黄葉龍溪性澄の註せし本、則ち溪抄十卷に専ら依準し、舊正保四年

板の本七卷に、或る人の假名抄せしもの、又前の夢窓國師語錄と同じく我が寺の十世大觀文珠の假名注、又は東嶺圓慈の同じき注などに依り、譯註校正ともに執筆せる丹の法常宮裡祖泰頭陀、こゝに附

記す。又記す、珠云くとあるは前記の如し。忠曰く、とあるは妙心龍華院の無著道忠和尚の虛堂錄翠耕を引きていふなれば、三者并せ對看を希望す。

虛堂和尚新添終

昭和四年十二月二十五日印刷
昭和四年十二月三十日發行

國譯禪宗叢書
第二輯第七卷

編者 國譯禪宗叢書刊行會

東京市神田區錦町一丁目十六番地

發行者 宮下軍平

東京市神田區今川小路一丁目六番地

印刷者 中村倍吉

東京市神田區今川小路一丁目六番地

印刷所 昭陽社印刷所



發行所

東京市神田區錦町一丁目十六番地

國譯禪宗叢書刊行會

振替口座東京四六〇一六番

終